

・
月の山脈こえて
死の谷くんだり

E・A・ポオ

一九七〇年、二月一日、午後十一時半。

高杉京平は、飛騨の山中にいる。

標高一二四九メートル、滝ヶ洞山の頂上ちかく。

高山市内の料亭で、大蔵大臣を刺し、逃亡三日目、即死させたわけではなかったが、手応えはじゅうぶんだった。

京平は、逃亡というよりも、待っている、警察が自分を発見するのを、あるいは抵抗する自分を射殺するのを。

(このひどい寒さにくらべれば、両手にくいこむ手錠すらあたたかいだろう、おれからながれる冷血は瞬時に煮えたぎるだろう)

京平はいま、巨石のうえに仰向けに寝ている。

ダウンパーカー、ジーパン、スニーカーというかっこうで、すべて京平好みの黒色だ。

肉体は死にかかっているが、精神は冴えかえっている。

(無数の星が、雪の結晶となってふりかかってくる)

そう京平はかんじたが、じっさい京平の五体にふりかかっているのは、透きとおった悪意というものだった。

七歳で、父親を刺殺した。

けっして悪人ではなかった父親は、ただ、京平の知らない女と一度寝てしまったにすぎない。

十二歳で、教師を刺殺した。

人格者でとおっていた教師は、ただ、京平に三回恋文をおくったにすぎない。

十六歳で、恋人を刺殺した。

処女だった恋人は、ただ、京平の前ではじめてオナニーをする真似をしたにすぎない。

そしていま、二十歳。

まだことしにはいって、一ヶ月しかたっていないのに、刺したのは大臣で八人目だ。

星たちは、高杉京平の存在とは無関係に、天空にあったが、高杉は、この世界に無関係なものはない、との思念をいただいている人間だった。

それは、書物からえたものではなく、他人を刺すことでえたものだった。

みずしらずの男女の恋愛も、異国の戦争も、虫たちの死や交尾さえ、すべて自分に関係がある。

世界の平和は自分の平和であり、もし世界に愛があるとしたなら自分にも愛がある。

(けれども、みんな仮定にすぎない)

京平にとっては、世界は殺意だ。

だから京平は、殺人鬼として世界と関係している。

殺すことによって、京平は充たされてきた。

しかしいまの京平は、世界の意志を〈死〉ととらえたがっている。

硬い手錠を待ち、重い弾丸に焦がれている。

(おれが射殺されたら、どんなに素敵だろう、まったく、死にたいほどの愉楽ではないか)

そのいっしゅんの孤絶をおもうと、京平のつかれきって凍りかけた全身はふるえだす。

三日間のまずくわず、険しい雪の山肌をはいのぼってきた。

黒い血がこびりついた短刀も、にぎりっぱなしだ。

いや、掌からはなれてくれないのだ。

冬の星座をみていると、人間といういきものが、いちばん下等なものと、京平にはおもわれた。

高杉京平は、天にむかってつぶやく。

「【死んだる団】バンザイ」

二日、午後一時半。

舟木英介は、【死んだる団】の調査のために、東海道新幹線で京都へむかっている。

この物騒でいかがわしく感じさせる名称を、私立探偵の舟木に教えたのは、ノンフィクション・ライターとして活躍している旧友の山内参三だった。

山内は三日前、舟木に昔のよしみで、東麻布の書斎（マンションの一室）に招き、仕事を依頼したのだ。

そのさいに山内は、【死んだる団】の団長として、辻中亀夫の名前を挙げた。

辻中は、全共闘の闘士として、ノンポリにも知られている男だったが、舟木にとっては二年前、恋人の川上真希がはしった相手だった。

舟木は胸裡でなにやろうずくものかんじながら、そのことは山内にはつげずに、

「その集団自殺でもしそうな宗教団体はなんですか」

と質した。

「明確にこたえられれば、たのんだりはしないよ」

山内は渋面をつくった。

「まるで、井上日召の血盟団をおもわせますね」

「それよりも、〈死なう団〉に似ているかな」

「そういえば、そんなカルト教団もありましたね」

「しかし、〈死なう団〉は、昭和十二、三年の軍国主義時代の事件だ。

現代はまがりなりにも、民主主義だろ。

だから、時代錯誤の連中の人殺しゲーム、そうおれは呼んでいる、いまのところは」

「いまのところは」

と舟木は、鸚鵡返しした。

「情報がまだすくなくってな。

一月十日の山形県庁爆破事件、十八日の大手町での銀行頭取刺殺事件、そしてきのうの高山での大蔵大臣刺傷事件。

頭取と大臣をやったのは、高杉京平という無職の青年だと判明している。

やつが、大手町で辻中亀夫の名前をさげび、高山で【死んだる団】バンザイとさげんだのを、数人の目撃者がきいている。

警察と新聞社はどうぜん、高杉をおいつめている、そこでおれは、辻中のほうに標準をさだめた」

「辻中が、【死んだる団】の団長だという証拠はあるのですか」

「証拠も根拠もないが、ただこの亀さんは、全共闘のカリスマでとおっている。

爆破事件のほうは爆弾マニアの藤上吾郎のしわざらしい。

この藤上とか高杉とかのチンピラをあやつるには、亀さんはふさわしい。

いずれにしても、藤上や高杉みたいなやつが、他に十人二十人いるとして、各地で要人を殺しまくったとしたなら、血盟団どころのはなしではない」

「政治色がつよいのは、たしかでしょうね」

舟木は、辻中亀夫をおもいながら、いちおうきいてみた。

「それがよくわからないのだ、というより、先入観で判断したくはない。

春には、週刊誌で【死んだる団】の特集を組み、直後には出版だと、編集長がいきごんでいやがる。

調査料は妥当な線しかはらえないが、誰よりもはやく、こまかい情報をてにいれたい。

舟木君、どうせ暇なのだろう」

「そのとおりです」

と舟木はいったが、じつは暇でもなかった。

二十代のころ、ボディガードをたくさんこなして、その危険にみあわない小銭をこつこつ貯めて、なんとか探偵事務所をひらいた。

五年目にして、ようやく依頼がふえ、現在も浮気調査を五件かかえている。

舟木はしかし、それらの依頼をキャンセルしてまでも、この仕事をうけなければならぬ、とかんがえていた。

辻中亀夫に、さほどうらみはなかったが、川上真希に、つよい未練があった。

そうしていま、舟木英介は、新幹線の自由席にすわって、厚手のトレンチ・コートを着たまま、腕組みをしているのだ。

目はずむっているが、眠ってはいない。

ときどき腕をほどき、まだ三十五歳なのに、めっきり白髪がふえてきた頭をいじる。

舟木はふたたび、山内参三のせりふを、おもいだそうとつとめる。

「よくわからないといったのは、もし山形や高山の事件のみならず、去年の暮れの、仙台や岡山の事件も【死んだる団】のしわざだとしたなら、やつらは、与党も野党もえじきにしているからだ。

まあ、ねらった相手がいずれも、そうそうたるお歴々だという点では、共通しているがね。

それとこれは、噂レベルにすぎないけれども、高杉、藤上らには、いわばアングラ的プロ意識というものがある。

ひとり五名、あるいは十名、殺したら、その団員の役目はおわる、やつらにはげない、逃亡はポーズだ。

やつらは死刑をねがう、でなければ自殺。

やつらにとって、功名心はもっとも忌むべき、邪悪な精神なんだよ。

前例があって、四年前の、連続射殺魔、あいつは【死んだる団】だったなんて、くちばしる刑事もいる。

さて、亀さんのアジトをおしえよう、京都嵯峨野で首をひっこめている、そこまでは、おれの情報網でつかんだ。

おれの記憶では、亀さんは三年前まで、清水印刷というちいさな会社でアルバイトをしていた。

社長は、たしか清水清といったな、水清くして亀すまず、亀さんがいた会社も嵯峨野にあるのさ。

こまかい場所はわからんが、どうだい、これだけでも、舟木君ならだいじょうぶだろう。

まずは、亀さんの尻尾をつかんで、うまく発見できたら、おれのかわりに君がインタビューしてくれ。

ねんのために、質問をメモしておいたよ。

おれは文弱の徒だから、危険なところへはいかない、そんなおれに、舟木君をプラスすれば、文武両道というわけさ。

おれもむかし世話になったなあ、ゆけ舟木君、航海にでろ」

もうかれこれ、十年になる。

当時新進のライターだった山内参三が、極右の政党〈愛心会〉の総裁、松本玄信を揶揄した文章を月刊誌にのせた。

山内のもとに、脅迫状がまいこみ、山内は、舟木英介にボディガードを依頼した。

舟木は大学の先輩でもある友人のために、からだをはったが、そのとき舟木は、松本玄信のボディガードをかけもちしていたことを、いいだせなかった。

新幹線が京都についた。

けれども舟木は、シートからなかなか立ちあがれないでいた。

いいだせなかったことが、うしろめたかったわけではない。

むろん、おじけづいたのではない。
柄にもなく、緊張していたのだ。

二日、午後五時。

山内参三はまだ、(書齋として借りている)麻布十番のマンションの一室にいる。
舟木英介と会談をしたときとおなじ、ラフなかつこうだ。

自分で入れたコーヒーをのみ、ハイライトをすいながら、届いたばかりの夕刊に目をおとしている。

一本立ちしてから、十二年になる。

それまでは、出版社の編集部で、嘱託をしていた。

主な仕事は校正で、いわゆるデキダカ制だ。

収入の不安定さが、山内の妻の精神をも、不安定にさせたのかもしれない。

結婚五年目で、妻に逃げられ、そのはずみで出版社をやめて、ノンフィクション・ライターの名刺をつくった。

仕事がいりはじめたのは、売りこみ開始から三年目で、月刊誌に特集記事を一本発表すると、すぐにうれっこになり、収入は嘱託時代の十倍になった。

政治家の黒い霧事件から、芸能人の愛憎問題まで、読者のとびつきそうなことなら、それこそなんでも書く。

けれども山内の原稿に、でっちあげはひとつもない。

自分があつめた情報の裏づけとして、探偵やアルバイトをつかう。

だから時として、原稿料より高くつくことがある。

それでも、てぬきはできない。

生き馬の目を抜くこの業界にあって、まがりなりにもいきぬいているのは、その姿勢のおかげだという確信がある。

校正をやってきて、おおくのライターのおおくの文章を読んだが、その九割は、いいかげんな文章で、いいかげんなことを書いたものだった。

それが山内の実感で、自分はその連中とはちがうという自負がある。

山内のくわえたタバコの灰がながくなって、いまにも膝のうえにおちそうになっている。

山内の目は、夕刊の社会面にすいこまれている。

《二月二日午前七時、山梨県巨摩郡身延山久遠寺の、山門を参拝に訪れた数名の観光客が、長い石段の途中で死んでいる、三名の男女を発見、すぐに交番に届けた。

警察の調べにより、所持品から身元が判明、死んでいたのは、清水市に住む自営業寺崎一平さん(三十八)と妻の夏子さん(三十二)、そして寺崎夫婦の知人である会社員遠山和彦さん(三十七)。

久遠寺の石段の最上部から落下したものと思われ、寺崎さんは頭部陥没、夏子

さんは内臓破裂、遠山さんは全身打撲で、いずれもほとんど即死状態であった。

近所の人のお話によると、寺崎夫妻と遠山さんは、新興宗教〈愛信会〉の信者として知り合い、その後愛情関係のもつれから、始終喧嘩が絶えなかったという。

遺書はなく、しかも遺体の状態から不明な点が多く、殺人事件の疑いもあるとして、山梨県警が捜査に乗り出すもようである。》

山内参三はタバコの灰がおちるのも気にならず、つと立ちあがり、せまい部屋のなかをあるきまわり、ひとりごとをつぶやく。

「三角、関係、で、久遠寺の、石段、か」

立ったまま受話器をとり、ダイヤルをまわす。

かける相手は、出版社時代の仲間。

「山内だ。

さっそくですまんが、以前〈愛信会〉に関する本の、出版企画をしたことがあったよね。

そうそう、日下典禪の〈愛信会〉だ。

その資料がまだのこっているだろう、それを一式、受取人支払いで送ってくれないか。

いや、原稿を書くわけじゃない、ちょっと気になってさ。

あの久遠寺の事件についても、なにかくわしい情報があるかな、そうか、新聞社にきいたほうが、てっとりばやいか」

電話をきり、つめたくなかったコーヒーをのみながら、山内は〈日刊スクープ〉にきいてみようとおもった。

二日、午後六時半。

舟木英介は、京都府内の旅館〈かわらや〉の岩風呂のなかにいる。

古い旅館らしさが気にいって選んだのだが、はいってから、旧いではなくみずぼらしいのだとわかった。

それでも岩風呂は、ふんいきがあって、ぜいたくな気分させてくれた。

湯気のなかに、ひとり先客がいた。

頭のとっぺんだけが、河童をおもわせるふうに、見事に禿げた初老の男だ。

それでも体格は、元相撲取りといってもいいくらいのもので、体格に自信のある舟木でも、いささか感心した。

海千山千の男、それが、舟木のうけた第一印象だった。

ひとみしり、というわけではないが、仕事柄よけいな関わりをもたないことを信条としている、舟木は背をむけたが、相手はかまわずに、

「やあやあ」

と、なれなれしく声をかけてきた。

ふりむいて、湯気のむこうを見つめると、

「待ってました、大統領、魚ごころあれば水ごころ」

標準語だったが、やはりどこかに関西なまりがあった。

「ぼくは大統領ではありませんが」

舟木にしてはめずらしく、皮肉っぽい返答をした。

「わしは待っている、その待っているわしの、目の前にあらわれたひとは、たとえ君でなくとも、大統領なのさ」

「だれを待っていたのですか」

「赤の他人のだれか、つまり、大統領」

「どうして、ですか」

訊きながら、やはり関わりたくなかった、と舟木はおもった。

「そんなことわからんのですか、想像力の欠如やね。」

こうしてわしは、ながいこと湯につかっている。

気持ちがにつまるのを待っているのだ、沈黙の音を聴きながらね。

そうして、あとはこの、ほどよくにつまった料理に、舌つづみをうってくれる、お客さんの到来を待つんや。

いたれりつくせり、一席もうけるわしの脇に、一期一会の貴君がくる、まさに、偶然は必然だ。

ひたすら待っているだけで、むこうから事件がやってくる、そんな探偵さんの、あさましい気分とはちがう。

百貫デブのわしは、初夜のはじらう乙女なんや、わかるかね、わしの悦びが」

百貫デブはしかし、いささかにつまりすぎたのか、紅潮したからだを湯船からもちあげ、へりにすわった。

しばらくは、取組をおえた力士さながら、荒い息をしていた。

「それでどんなふうに、気持ちがにつまったのでしょうか」

舟木はまだ、関わりたくなかったが、こんな縁からおいしい情報がはいることを、仕事柄わかってはいた。

「人間には、土からうまれたものと、水からうまれたものと、二種類いるということ。」

土からうまれた人間は、土のうえに横たわると安心する、水からうまれた人間は、水につかっていると気楽なんだ。

さしずめ、わしは水で、どうやら、貴君は土かな、カラスの行水やね」

いって、おおらかに笑う相手をのこして、たしかに舟木はもう、岩風呂からでるつもりだった。

相手のたからかな声が、背中にふりかかってこなければ。

「貴君にきらわれる前に、おそまきながら自己紹介しよう。」

わしは京都大学哲学科の教授で、朝山完吉。

『暗殺論』は拙著ではめずらしくうれたので、貴君もごぞんじかもしれない。

七十年代の哲学者は、哲学の道なんぞ歩かん、思索にふけるなら、散策するよりも、風呂にはいるにかぎる。

〈かわらや〉の息子が、わしの教え子だから、遠慮なく、タダ風呂というわけ

で、以上、失敬した、なっ」

舟木も『暗殺論』は読んでいた。

おそろしい本だとかんじただけで、内容はほとんど忘れていたが、
「暗殺が暗いのは、暗殺をする人間が暗いからである」とか、
「暗殺者は偽悪者であるから、偽善者よりはましである」とか、
「暗殺が世界から消滅するときは、世界が消滅するときである」とかの、アフォリズムふうな数行だけは、なんとなくおぼえている。

そんなことよりも舟木は内心、しめた、とおもっている。

おもいがけず、いや内実はおもったとおりに、おいしい情報がえられそうだ。

そうなのだ、この世はすべて偶然でなりたっている。

そしてそれは、結果的に必然となる。

「もうしおくれましたが、ぼくは東京からきた、舟木英介というものです。

仕事は、しがない、いや、あさましい探偵です」

「わかっている。

貴君のその眼は、刑事か探偵の眼だ。

刑事が夕刻から岩風呂はないから、のこるは探偵さ」

朝山の息づかいは、もどっていた。

「それなら、単刀直入にいかせてもらいます。

朝山先生にひとつ、おききしたいことがあります」

「一も二もない、失言したおわびや、なんなりと」

朝山は鷹揚なしぐさで、質問をもとめた。

「【死んだる団】を、ごぞんじありませんか」

舟木がいきおいこんできいたせいか、朝山は汗のしたたる顔を、タオルでしきりにふいた。

「新撰組、やないね」

「幕末ではなく、現代のはなしですよ」

「長いあいだわしは、新聞も読まないし、テレビも見てないからねえ」

「ぼくが【死んだる団】という名称をしったのは、つい最近のことです」

「となると、ずいぶん時代錯誤の団体さんやな、大時代的な印象をあたえる。

そうか、貴君はその団体さんに加盟するために、京都までやってきなすったんか」

「そうではなく、探しているんです。

あさましくとも探偵ですから」

「いったいだれを」

「【死んだる団】の辻中亀夫です」

「亀。きいたことあるな」

「いま嵯峨野に潜伏しているそうです。

清水印刷という会社のちかく、との情報もあります」

「清水か、それでおもいだした。

五年ほど前になるのかな、嵯峨野の清水印刷に、わしの研究書の印刷をたのん

だことがある。

そのさい、こまめにうごいてくれたのが、その亀夫君さ、無口で真面目な青年だったが。

亀夫君は、そのぶっそうな団体さんに、所属しているのか、なっ」

「ぶっそうなのはおそらく、『暗殺論』といい勝負ですね。

亀夫は【死んだる団】の団長だそうです」

「人はみかけによらんもんや、母ひとり子ひとりとかで、母親の話をきいた記憶がある。

ただ亀夫君は、他人と一線を画すふんいきをもっていたな。

ところで【死んだる団】の本質とは、なんぞや」

「それをしらべるのが目的なんで。

亀夫が全共闘の闘士であることは、ごぞんじですよな」

「もしかするとわしは、無知な人間なのかもしれない」

「去年の〈東大安田講堂事件〉、いわゆる〈安田砦〉から、眼下の機動隊に、小便をふりかけたのは、亀夫です」

「人はみかけによらんもんや。

またわしは、思索にふけりたくなかったから、すまんが貴君は、先にあがってくれたまえ」

「じつは明日、その清水印刷にいきたいのです。

恐縮ですが朝山先生、案内していただけますか」

「ことわるにも、わしは暇すぎる、暇すぎるわしは暇が本業や、なっ」

二日、午後十一時。

藤上吾郎は、新宿のはずれの安アパート、〈立春荘〉の一室にいる。

暖房のまったくない部屋なのに、Tシャツと短パン姿で、額には脂汗さえうかんでいる。

常人とはちがう巨大な目玉をもつ吾郎は、ためつすがめつしつつ、手作りの小型爆弾を愛撫している。

高杉京平の大手町と高山での活動を、新聞でしった吾郎の胸中は、共感と焦燥と嫉妬でもえあがっている。

(こんどは、おれの番だ)

実業高校一年のとき、尊敬する人物はだれか、と教師に問われ、織田信長や西郷隆盛をあげる級友をあざ嗤い、吾郎は辻中亀夫の名をくちばしした。

教師の顔がかたまり、教室の空気が一変した。

二年のとき、まよなか吾郎は、校内の化学実験室にしのびこみ、火薬の製造に失敗してボヤをおこし、退学処分となった。

ふるさと山形から上京したが、大学をあきらめていた吾郎は、居酒屋ではたらきながら独学した。

図書館を利用し、『聖書』も『仏典』も『資本論』も『暗殺論』も読み、辻中亀夫にしきりに手紙をだした。

吾郎の手紙には、きまって「かったるい」というコトバが、いくつもはいていた。

隣の部屋では、男女の睦みあう声と音がきこえるが、吾郎は意に介さない。

もし吾郎が、性的快楽をかんじるとしたなら、爆発音をきいたときだけだろう。

「こんどは、おいらの番だ」

こんどは吾郎は、抑制しつつも声にだした。

「山形では失敗した。

おいらは完璧だったが、くそったれの豪雨が邪魔をしたんだ」

三日、午前六時。

朝山完吉は、旅館〈かわらや〉の一室で、ドストエフスキーの『悪霊』の原書を枕にして、まだ熟睡している。

朝山のふとんの枕もとでは、何本ものビールびん、何本ものとっくりが、いっしょに横になっている。

やはり何本ものタバコのすいがらが、灰皿をとびだし、ロープシンの『蒼ざめた馬』の原書が、灰皿の下敷きにされている。

原稿用紙が散乱しているが、なぐりがきの文字は、酒びたしになって、本人にすら読めないだろう。

あさまだき、浴衣姿の舟木英介が、この部屋にはいったとき、まっさきにかんじたのは、どういうわけか〈無常〉というコトバだった。

そして異様な臭いで、それは死臭ににっていた。

舟木は立ちつくしたまま、

「見渡せば、花も紅葉もなかりけり、か」

と溜息とともにつぶやいた。

すると、眠っているはずの朝山の、ささやき声がする。

「裏の苦屋の秋の夕暮れ、か」

朝山の巨体を舟木がのぞきこむと、朝山はしずかに目をあけた。

「朝山先生、おめざめですか」

「めざめたはいいが、いまは秋でも夕暮れでもない、散歩日和の、透明な朝だ。

凍る朝、凍る人生、凍る思想、さあ、でかけよう、なっ」

意外なほど身軽に、朝山は立ちあがった。

「顔ぐらい洗わせてくれませんか」

舟木が寝ぼけ声でいうと、

「いかんいかん、顔はむろん、髪もからだも洗ってはいかん、そんなことは余計な行動や。

いまの学生も、そんなことばかりに時間と金をかける。

貴君の存在は、貴君の人生の持ち時間にひとしい、その真実をしておいたら、そんなことは軽はずみにはできないはずや、なっ」

「酒をのむことは、軽はずみにできるのですか」

舟木が皮肉っぽくいうと、

「酒をのむことは、軽はずみにできることだから、酒をのんでいるのではないか」
やや怒気をふくんだ声調に、舟木は無意識に相槌をうっていた。

(二日酔いの先生に、案内役は無理かな)

舟木のおもいを見透かしたのか、朝山は背伸びをしてから、

「【死んだる団】、辻中亀夫、清水印刷」

と力づよくいいはなった。

いそいで着替えをし、そそくさと〈かわらや〉をでた。

たしかに透明な朝だった。

さしはじめたばかりの、鋭角的な陽射し、それでもいまだ凍った空気、無風無音の通り。

このとき、いっしゅんではあったが、舟木は川上真希をおもいだしたのだった。

「貴君は、わしと歩調をあわすのを厭がっとなるね。

きのうのきょうで、金蘭の変わりってわけにもいかんか、なっ」

「そんなことはありませんよ」

(走りつづけるのに慣れた者でも、こうしてゆったり歩きたいことがあるものだ)

との感慨を舟木は述べたかったのだが、うまく説明できそうになかった。

「なら、もっとはやく歩いたらどうかね」

舟木はコートのポケットに手をつっこんでいたが、朝山は木綿のシャツとパンツのかっこうだった。

しかも、素足に下駄ばきだ。

のんびり歩いたら、すぐに風邪をひきそうだ。

「せっかくの京都ですから」

意地悪な気分になった舟木は、そういうと、また真希をおもいだした。

(京都にいこうと約束したのは、三年前の秋だったな)

舟木と朝山は、烏丸通りを歩き、京都駅に向かっていた。

「【死んだる団】か、獅子身中の虫でなければよいが。 わしなら【殺ったる団】と名づけるがね」

なにげなく朝山がいった。

さすがは『暗殺論』の著者だ、と舟木にはおもわれた。

だが舟木にも、【死んだる団】の全貌は、ふかい霧のむこうだった。

京都駅から嵯峨野にむかう電車にのった。

車中、なぜか朝山はうかれていて、そのせりふは鼻歌ふうだった。

「鷹のように鋭くもなく、梟のように射るでもなく、馬のようにやさしくもなく、猿のようにこざかしくもなく、豚のようにさびしくもなく」

「なんのことですか」

「眼や、亀さんの眼」

三日、午前七時。

山風順一は、〈立春荘〉の向かいの駐車場にいる。

車のなかで張り込みをして、すでに十時間あまり。

新宿警察署の相棒の、花井健太刑事が、どこからかジャムパンと牛乳を買ってきた。

「先輩、なにか変わったことはなかったですか」

若い花井は、徹夜につよく、声にまだ張りがあつた。

山風はあくびをひとつしてから、

「ガセネタかもしれんな」

とつぶやいた。

だが、本音はちがった。

昨夜、うちのアパートにいる若い男が不審なようすだ、と通報があつた。

ひと晩中、なにか妙なものをつくっているみたいだ、という。

なにか妙なものとは、爆弾を意味していると、察知したのだ。

「いつまでまっても、ラチがあかん、すくなくとも名前と部屋はわかっているんだ。

ちょいと探りをいれてみるか」

「ふたりでふみこんだら、おおげさですね。

令状はあるかってくるでしょう、とりあえずぼくが」

いって花井は、ひとつ深呼吸をした。

「そうか、そうしてくれ。

いいか、こういうんだ」

山風は花井の耳元で、ささやき声で指示をだした。

ちいさくうなずいた花井は、わざと烈しく足音をたてながら、〈立春荘〉にふみこんだ。

藤上吾郎の部屋の前にきて、ドアに手をかけると、なぜか鍵はかかっていた。

花井は警察手帳を、腕枕で横になっている吾郎の目の前につきだしながら、山風から指示されたとおりにつけた。

「朝っぱらから失礼します。

じつは我々の追っている爆弾魔が、このふきんに潜伏しているとの情報がありました。

それでなにか問題はないか、みなさんのご様子をうかがっているのです」

白い息をはきだしながら、部屋をみまわしたが、しらべる必要もないほどだった。

犯人が隠れそうな、家具も押入もない。

どころか、この部屋には、テレビも冷蔵庫も、茶碗とか洗面具とかの小物もな

い。

とにかくなにもない部屋なのだから、爆弾とか不審物があるわけもない。

ただ、吾郎の短パンの股間部分が、血らしきもので染まっていることに、花井は気づいた。

「怪我でもなさっているんですか」

と花井がきくと、

「持病の痔が悪化しちゃって」

と吾郎は、虚言とはおもわれなさない声でこたえた。

花井はおとなしくひきあげ、車のなかの山風に、こう報告した。

「とくに異常はありません。

やはりガセネタかもしれません」

それからひとこと、添えた。

「あんな貧しい青年が、まだ日本にはいるんですね」

三日、正午。

舟木英介と朝山完吉は、嵯峨駅をおり、駅前の茶店で時間をかけて団子をたべ、山にむかってあるいている。

もう長いことあるいているが、観光客の姿も見えず、まだ本格的な雪もふっておらず、のどかな風景だ。

朝山は観光案内人よろしく、これが落柿舎、これが祇王寺、これが念仏寺と、その由緒や歴史を、念仏に似た語り口で、こまかく説明してくれた。

けれども舟木は、すっかり馬の耳になっていた。

落柿舎も祇王寺も念仏寺も、すどおりしてほしかったとかんがえていた。

なにも目にはいらない舟木は、鷹でも梟でも猿でも馬でも豚でもない、人間の眼をおもっていた。

これから見るはずの、辻中亀夫の眼を。

突然まえぶれもなく、朝山は脇道にはいり、ゆるやかな山道をのぼりはじめた。

きゅうに気温がさがった気がした。

はく息の白さがきわだってきた。

朝山の背中をながめながら、舟木は、この人物の薄着の理由を自分なりにかんがえてみた。

(心頭滅却すれば、火もまたすずし、氷もまたあつし、か、ただものではない。

いつか『暗殺論』を再読してみなければ)

それでも舟木は、哲学者はうさんくさい、とかんがえていた。

生き馬の目を抜く都会で暗躍している舟木にとって、朝山のおもわせぶりの余裕しゃくしゃくの態度は、ひどく気にさわっていた。

朝山が足早にあるいたのは、はじめの三十分のみだった。

そんな舟木のおもいを増幅させる、朝山の鼻歌がきこえてきた。

「音がする、音がないのに、音がする、音がない、音がするのに、音がない」
舟木が咳払いをすると、朝山は前をむいたまま、
「ねえ、こういう道を、こうしてあるいと、冥土にむかって、黄泉の国に
むかって、あるいている、そんな気がしないかい」
舟木はふたたび咳払いをしてから、
「ぼくは、目的にむかって、あるいているのです」
と断固たる口調でこたえた。

三日、午後一時。

山風順一は、新宿署内の仮眠室にむかって、階段をのぼっている。
うへの階から、手錠をかけられた暴力団ふうの男が、担当刑事につれられてお
りてくる。
ふいに男がわめく。
「てめえみたいな暴力デカはいねえ、覚えてろよ、いつかケツの穴に、ドスぶち
こんでやっかん」
苦笑しながら山風はやりすごし、階段をのぼりきると仮眠室のドアをあけた。
花井健太がすでに横になっていて、山風に気づくと声をかけてきた。
「山さん、おつかれさま」
「なんだ花ちゃん、おきていたのか、あんたはいつも元気でうらやましい。
この歳になると、寝不足はつらい、痔もわるくなる一方だから、階段もきつい
しな」
「そういえば、例の青年、藤上吾郎も、かわいそうにひどい痔主らしいですよ。
パンツが血まみれになるほど、出血していましたからね」
「それは若いんだから、おれよりかわいそうなのはたしかだ」
「上には、いや、下には下がいるもんですね、山さんの百倍はつらそうでしたよ」
「おれもたまに出血、出血、出血、け、け、け、ケツの穴から」
「山さん、なにか」
山風のコトバと顔色の変化を、花井はみのがさなかった。
「しまった」
おもわず山風はさげんだ。
「花ちゃん、それだよそれ、あのヒッピー野郎は、ケツの穴に爆弾をつっこんだ
んだ。
文字通り苦肉の策で、頭かくさず尻かくしたんだ」
刑事稼業三十年の、カンというほかはない。
「ええっ、まさか」
「おれのカンが当たっているとなると、こちとらの考えているよりも、はるかに
敵はおそろしいやつだぞ」

三日、午後一時半。

小金井豊は、〈日刊スクープ〉名古屋支局から飛驒にむけて、(ガソリン表示がゼロにならないとブレーキがかからない) ブルーボードをはしらせている。

デスクの命令ではなく、宿命といってもおおげさではない衝動にかられ、おのれ独自の判断でうごいたのだ。

小金井記者の目的は、殺人鬼高杉京平を独力でさがしだし、単独会見をすることだった。

もし成功すれば、数日後の紙面のトップをかざり、小金井はたてつづけに、〈日刊スクープ〉の販売部数をのぼす、手柄をたてることになるはずだ。

だがそんなことは、胸中になかった。

成功とか手柄とかのコトバを、小金井が意識し、くちばしったことは、十年の記者生活でいちどもない。

小金井はこどものころから、好奇心のかたまりだった。

いつも好奇心が、小金井をつきうごかしてしまう。

小学一年のとき、町にきたサーカスの猛獣使いに魅せられ、隣町までついてしまったことがある。

とうじ誘拐事件として新聞にのってしまったが、これに似た事件は、中学時代にも高校時代にもあった。

その困った性格は、ますますつよくなる。

そしてその結果として、成功と手柄がのこる。

情報最前線記者、小金井豊の名前は、名古屋のみならず全国になりひびき、あここがれて新聞記者になりたがる大学生は、あとをたたない。

けれども大学生諸君が、もし直接小金井豊にあったならば、驚嘆と失望と悪臭とで、首をくくりたくならないまでも、すくなくとも鼻をつまむにちがいない。

小金井には自分しか、自分の好奇心しか、あたまにない。

そのほかのことは、露骨に無視する。

他人に挨拶をしない、他人の顔を見ない、他人の話をきかない、他人になにをきかれても返事をしない。

小金井が相手をするのは、小金井がえらんだ人間のみだ。

また、(すりきれでもしないかぎり) おなじものを(上着はもちろん下着まで)何年も身につけているから、臭いなんてものではない。

だから社内では、鼻持ちならない個人主義者、外も内も腐った人でなし、と陰口をたたかれている。

小金井自身は、そんなことはしらないし、しったにしても、そんなことで気を病む男ではない。

三日、午後二時。

山風順一と花井健太は、〈立春荘〉藤上吾郎の部屋のなかで立ちつくしている。畳のうえに、やや黒ずんだ血が付着している。

「もう戻ってはこないだろうな」

山風刑事がつぶやいた。

「めんぼくありません」

花井刑事が頭をさげた。

「しかたない、おれが花ちゃんでも、簡単には気づかないさ。

ともかく問題は、なんとか次の事件を未然にふせぐ、手だてがないかということだ」

「指名手配しましょう」

「そんな生ぬるいことでは駄目だろう、やつが行動するのは、きょうか、あすか」

「尻に爆弾をうめこんでいたんじゃ、あるくのもままならないでしょうね、タクシー会社をかたっぱしから洗いましょう」

「おそらく手おくれだな」

「それじゃ」

「いままでの爆弾事件が、すべて藤上吾郎のしわざだと仮定しよう、爆発物は超小型、なのに高性能、ちゃちな建物はねらわないはずだ、しかもやつは必ずまだ新宿にいる。

もし事件が一両日におきるとしたなら、ここでおきる、まちがいなく大企業のはいつているビルディング、それも三本の指にはいるもの。

まずはそこに連絡をして、出入り口のチェックを厳重にやってもらうことだな。

警官も派遣してもらおう、いいか、おれたちは最悪の状況をかんがえ、絞りこんで、現場で逮捕するしかないんだ」

「できるでしょうか」

「できなくとも、やるしかないんだ」

三日、午後二時半。

朝山完吉と舟木英介は、まだ嵯峨野をあるいている。

「もうそろそろや、ここらでひと休みしようや、なっ」

朝山が枯れた雑草のうえに、腰をおろそうとすると、舟木が声とからだでとめた。

「そろそろなら、休まずにいきましょう、だいたい先生は、休みすぎます、いきおいがよかったのは最初だけで。

もしかして、しりつぼみの人生なんじゃありませんか、あるいている時間よりも、休んでいる時間のほうがおおい、風邪をひくのがおちです」

「そうかな、わしの頭に休みはないんだが」

「だいたい、こんな山奥に、印刷屋なんてあるんですかね」

「そうおもいつつも、お互いあるとおもっているから、やってきているんや、なっ」

「それもそうですね」

ふたりは顔を見あわせて笑った。

うさんくさいとおもいつつも、舟木は朝山をたよっていた。

朝山の背中を何時間も見つづけていると、それがたよれる人間のものだとおもえてきたのだ。

それと、朝山の笑顔は、フィロソフィカル・スマイル（哲学的微笑）というものだとおもわれて、安心感が湧いていた。

「噂だから、貴君には報告していなかったが、清水印刷は倒産したとのことや。

清水清社長の視力の極端な低下が原因らしいが、わしにはくわしいことはわからん。

百聞は一見に如かず、ともかくいって見るしかない。ほんとうに清水印刷がそういう状態なら、辻中亀夫もはたして嗟嗚野にいるかどうか」

朝山はあるきだしている。

「ねえ、朝山先生」

「先生はやめてくれよ、ここは教室ではない」

『暗殺論』の先生のおもうところ、辻中亀夫という人間は、どういう半生をおくってきたんですかねえ」

「いい質問をするね、くやしいがわしの薫陶よろしくうけた、生徒たちよりも優秀や。

それぞれ、そこが、亀さんのキー・ポイントというやつだ、貴君も、亀さんと会見する前に、そのことを貴君なりに、想像し想定する必要がある」

「もしかすると亀夫は、だれかの薫陶をうけた、ということはないでしょうか、たとえば朝山完吉先生、とか」

「かいかぶってはいけない、わしは、北一輝ではない。

それに、わしの印象では、亀さんが、そういうタイプの人間とはおもわれない、他人からの影響をうけつけないくらいに、自己というものをつよく保持している人間」

「お言葉ですが、自己をつよく保持するためには、だれかの薫陶が必要なわけではありませんか、全共闘の闘士となるための薫陶、【死んだる団】の団長となるための薫陶。

平凡な発想かもしれませんが」

「平凡こそ最強、もっと単純明快にかんがえてもよかないか、なっ。

たとえばそうやな、全共闘運動の挫折による【死んだる団】」

「おおきな挫折をしたなら、ふつう自殺をえらぶでしょう」

「だからや、【死んだる団】。

連中は、本質的には、殺人集団、というよりも、自殺集団ではないんか」

朝山の発想に、舟木はいっしゅん息がつまった。

もし仮に、そうだとしたなら、川上真希はすでに自殺しているかもしれないの

だ。

「まだきめつけないでください、その本質をしるために、亀夫に会おうとしているのですから」

「おっしゃるとおり、人間にたいする思索の根幹になればならんのは、人間はアンビヴァレントな生物ということの認識や。

単純明快かつ複雑怪奇、失敬、失敬」

つと朝山が立ちどまった。

「つきましたか」

舟木も立ちどまった。

「じつに哲学的な散歩やったな」

清水印刷は、(倒産したせいなのかどうか) 看板もでていない平屋で、猫のひたいほどの庭に、三匹の野良猫がいねむりをしている。

朝山は舟木の顔先に、けっして清潔とはいえない指をつきつけ、

「亀さんに会う前に、貴君にいつておきたいことがあるんや」

「なんでしょう、なんなりと」

「理屈はさておいて、わしは五十五歳というこの年齢になって確信をもったのだが、いくら天才といえ秀才といえ、二十代の人間なんて、たかがしれているということ。

わしは亀さんについて、もっともらしいことをいったが、亀さんも二十代のはずだから例外ではない、貴君はどうかしらんがね」

「ぼくは三十五ですが、この髪ですから四十五に見られます。

ぼくも、たかがしれている人間です、社会と戦ったこともなければ、自分と戦ったこともない。

「ぼくは先生とちがって知性のない人間ですから、からだをはって生活をしてくるしかありませんでした」

「なにか一本とられたかんじやな。

いいたいことは、先入観ぬきで会うとよかろうということや、なっ」

「先生、はじめて良いアドバイスをくれましたねえ」

舟木のコトバに、朝山は豪快に笑った。

辻中亀夫がもしちかくにいれば、とびだしてきそうな大声だった。

三日、午後三時。

辻中亀夫は、清水印刷の裏の、ほったて小屋にいる。

太い眉、細い眼、団子鼻、出っ歯、あばた面。

イガグリ頭をかきむしりながら、宛名も差出人も偽名で送られてきた、藤上吾郎からの、おそらく最後の手紙を、くりかえし読んでいる。

表で笑い声がするが、ハイキングの連中だろうとおもって、気にとめない。

《前略。

まだ生きていますか。

いよいよ、おいらの番です。

苦痛も恐怖も悲哀も、まったくありません。

ちょいと愉しくさえあります。

おいらは、華やかに潔くやります。

最期も、高杉流の愚図愚図はしません。

ただ、仙台や岡山のちゃちな爆破事件の犯人といっしょくたにされそうなのは、無念です。

辻中兄がいつか濡衣をはらしてください。

いや、それは無理なそうだったのでした。

ほんとうは、心残りなんてないのです。

東京は毎日快晴、寒さはかんじません。

なかなか佳い人生でした。

むかしから人生五十年というけれど、あと三十三年も生きるなんて、かったるいだけです。

【D】へは報告済みです。

涅槃で会いましょう。

それまでお元気で。

ご幸運を。

人間十七年、下天の内をくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり。

藤上 拝》

辻中亀夫はなんども、おおきな溜息をつく。

三日、午後三時十五分。

高杉京平は、とうとう飛騨滝ヶ洞山をおりはじめている。

気にいった死に場所をもとめて。

ちなみに京平は、この一時間後、山の中腹の墓地にさまよいこむことになる。

そしてよせばいいのに、墓前にそなえてあった十個の団子を、すべてたいらげる。

そのさらに一時間後、京平はひどい腹痛と下痢におそわれ、山裾でもだえくるしんでいるところを、山狩りに協力していた地元の青年団に発見されることになる。

青年団は、警察に通報することなく、〈日刊スクープ〉の小金井豊記者に報告する。

なぜなら青年団は、小金井から事前に、すくなからぬ金銭をうけとっていたか

らだ。

三日、午後三時半。

舟木英介と朝山完吉は、清水印刷の裏のほったて小屋で、辻中亀夫と会見している。

亀夫は、舟木が想像していた男とは、まったくちがっていた。

亀夫は、顔見知りの朝山が訪ねてきたことに気づくと、舟木ともども、気さくに招き入れた。

それから、一方的な客にたいして、丁寧に挨拶をした。

朝山とは再会の握手をし、舟木には自己紹介をした。

舟木も名前だけなのって、東京からきたとつげた。

小屋のなかは、亀夫の身なりと同様に、とほうもなくみすぼらしかったが、亀夫は、座布団と、あつい煎茶もだしてくれた。

朝山がショートホープをとりだすと、灰皿も用意してくれた。

「さっそくですが、本題にはいられたらいかがでしょう。

こんな山奥まで、わざわざおふたりでやってくるのには、よほどのわけがあるんじゃないやありませんか」

亀夫は、冷静な表情と声でいった。

「わけなんかない」

と朝山がいうのを遮って、

「わけをいいます」

と舟木はこたえた。

舟木は正座したまま、素直に話しはじめる。

「じつは、ぼくは私立探偵です、そう腕の立つ探偵ではないので、ご心配なく。

ぼくに調査を依頼したのは、友人で、依頼人の名前はいえませんが、その人からぼくははじめて、【死んだる団】という名称をききました、しかもその【死んだる団】の団長が辻中亀夫、つまりあなただという。

すごい情報網をもっている人だから、ぼくはその話を信じました。

もちろん、あなたの名前は、よくしっています、全共闘の闘士として、新聞紙上をにぎわしていた人ですからね。

ただ、正直にいうと、【死んだる団】の団長かどうかは、どうでもよくて、ぼくはあなたに会いたかった。

これは、少々いいにくいんだけど、川上真希という女性を、しっていますよね」

舟木の表情はきびしくなったが、亀夫のほうは変わらなかった。

舟木は、亀夫の顔色をうかがいながら、念をおした。

「知っている、どころの、話では、ありませんよね」

「いいえ、しりません」

亀夫は即答した。

「そんなはずはない」

「真希は、ぼくの恋人、正確には恋人だった女で、ぼくたちは、うまくいっていた。

それが、ある日とつぜん、青天の霹靂ってやつですよ、真希は、ぼくの前から姿をけした。

置き手紙がのこされていたけれど、いま手元になく、おもいだすのも忌々しいが、こんな内容です。

〈新しい恋人ができました、ごめんなさい。

舟木さんを、きれいになったのではありません。

わたしは、辻中亀夫さんのところへいきます、さようなら〉

「おぼえがありません」

亀夫は、すまなそうにいった。

「シラをきらないでください、ぼくも本音で、真剣に、話をしているんですから」

おこっていたわけではないが、舟木の口調は、おこった人のそれだった。

「まいったなあ、ほんとうに、しらないんですよ」

「ぼくも、まいったな、しらないんですか、ほんとうに」

舟木は、亀夫の眼のなかを注視していた。

亀夫も、舟木の眼のなかを注視していた。

(それなら、あの真希が、嘘をついたというのか)

どうにも舟木は、信じられなかった。

真希は、莫迦がつくくらい、正直な女だった。

過去の男関係も、あますところなく告白した。

その日の行動も、くまなく語ったものだった。

仕事柄、秘匿事項がおおく、恋人にさえいえないことを、いつもかかえていた舟木は、うしろめたかったくらいだ。

「話がややこしくなってきたね」

と、朝山が口をだす。

「こういうときは、第三者の意見に耳をかたむけるのも手や。

なあ、同姓同名ということもあるやろ。なっ」

「辻中亀夫の同姓同名というのは、ちょっと無理がありませんか、佐藤一郎ならともかく」

そう応じたのは、亀夫自身だった。

このせりふで、舟木は、亀夫が嘘をいっているのではないことを信じる気になった。

また朝山が口をだす。

「もうひとつ、かんがえられることはある、つまり、その川上真希さんは、別名をつかっている。

その別名を仮に、井上真子さんとしよう、亀さんは、川上真希さんはしらないが、井上真子さんをしっている、いかがか、なっ」

「それもかんがえられません。

なぜなら私めは、いままで恋人と称する女性と、一度もつきあったことがないからです。

理由のひとつは、私らはこの容貌ですから、女性が逃げることはあっても、近づいてくることなんかない。

もうひとつは、自分でいうのもなんだけれど、私めは革命家です。

太宰治が〈恋と革命〉っていったけど、恋と革命は両立しない、それが私めの思想です。

朝山先生の『暗殺論』からの、うけうりの思想」

「わしは、そんなこといっとらんよ。

それに亀さん、それだけで弁明になるもんかの」

朝山の疑問に促されて、亀夫は姿勢を正して、

「それなら、決定的なことを白状しましょう、舟木さんも真摯に話してくれたことですし、私めも、正直にいます。

じつは、私めは、同性愛者、なのです」

おもわず朝山と舟木は、顔を見あわせた。

予想だにできなかった結論に、舟木はわけがわからなくなってきた。

【死んだる団】の調査と、辻中亀夫への質問は、あとまわしにして、まずは川上真希の失踪調査をしたいくらいだった。

しばしの沈黙ののち、亀夫がおちついた口ぶりで話しはじめる。

「私めには、ひとつ疑問というか、腑におちない点があるのです。

その真希さんという女性は、手紙で〈新しい恋人ができた〉と書いているそうですね。

それから〈辻中亀夫のところへいく〉とも書いているそうですね。

けれども、新しい恋人イコール辻中亀夫だということは、書いていないのではないですか」

舟木のかすかな動揺をたしかめてから、亀夫は話をつづける。

「一枚の紙のなかに〈新しい恋人〉と〈辻中亀夫〉がはいっていけば、かんちがいするのはしかたありません。

しかし舟木さん、どうでしょう、そこに書かれていた人間の名前が、〈辻中亀夫〉ではなく、〈辻中亀子〉だったとしたなら。

舟木さんは〈辻中亀子〉を〈新しい恋人〉とおもいこむでしょうか」

舟木は驚きと恥ずかしさで、声を発することができなかった。

(亀夫のいうとおりだ、ぼくは嫉妬にくるったあたまで、新しい恋人イコール辻中亀夫と、とっさにおもいこんでしまったのだ。

そして丸二年、亀夫を目の敵にしてきた)

うなって腕組みする舟木の代わりに、朝山が質問をなげかける。

「それならばや、真希ちゃんのいまの恋人とやらは、だれなんじゃ。

なぜに真希ちゃんは、亀さんのところへいくなんて書いたんや」

「いまさらぼくが解説するのも、どうかとおもいますが」

宙をみつめながら、ようやく舟木が声をだす。

「もしかすると、こんなことなのかもしれません。

あのころは、全共闘は辻中亀夫、辻中亀夫は全共闘。

べつにお世辞ではなく、誰にもそういうイメージがあったとおもいます、すくなくとも、ぼくも真希もそうだった。

だから、辻中亀夫のところへいく、ということは、全共闘に加担するということなのかもしれない」

ここで朝山が口をはさむ。

「一理あるな。

しかしだ、重要なことは、真希ちゃんにそういう興味とか、志向があったかということや。

貴君は青天の霹靂というたが、恋人だったら、なにか予兆をかんじたはずや」

そういわれれば、なにもかんじなかったわけではない、と舟木はおもいにしずんだ。

それなのに、多忙を口実に、真希の話にとりあわない日々が、ふえていたことはたしかだった。

「おう、雨がふってきたな、雪になるかもしれん、なごり雪かな、それとも、もどり雪かな、風流なもんや」

朝山がちいさな窓をあけた。

つられて顔をあげた舟木にも、雪まじりの雨がみえた。

風も強くなってきて、小屋が鳴りはじめた。

亀夫が立ちあがり、粗末な押入から古びた毛布をひっぱりだした。

「あいにく暖房がありませんので、これで我慢してください」

いいやつじゃないか、と舟木はおもった。

(亀夫が真希の新しい恋人なら、文句のつけようもないのだが)

おもいながら、こうたずねる。

「あなたは、真希の新しい恋人とやらの、まったく心当たりはないのですか」

「心当たりは、あるのです」

亀夫の即答は、たずねた舟木にも意外だった。

亀夫は、舟木と朝山の足に毛布をかけてあげながら、おもむろに話した。

「さっきもいったように、川上真希さんという名前は、しりません、けれどもひとつ、おもいだすことがあります。

もう三年前になりますか。ある日、きれいな女性が、私らのアジト、というか、たまり場にやってきました。なんの前ぶれもなく、なんの自己紹介もなく、唐突に、仲間に入れてほしいと、おもいあまったふうにいうんです。

仲間はみんな、理由もきかずに賛同しました、とにかく美人すぎましたから、私らは拒めないふんいきでした。

それでも、しばらく間をおいて、私めだけが反対をしました、この人をくわえることによる、仲間割れとか痴情のもつれとか、そんなつまらぬことを、私めはおそれたのです。

私めがあまり強くいいはるものですから、仲間は渋々あきらめました。

その人は、あきらめたようにはみえませんでした。おとなしく帰っていきま

した。そのとき仲間のなかでいちばん若い、松本大海という男が、その人を追っていたのです。

大海がなかなかもどってきませんでしたので、一目惚れかな、なんて、みんな

で苦笑していたものですが、大海は一時間ほどして、もどってきました。

大海はなにもいいませんでしたし、仲間も、きくのは野暮なことだと、しらん

ふりをしていました。ただ私めは、責任感もあったのでしょう、大海の様子をうかがっていたもので

す。そうして、おもったことは、大海は、その人をしっていたんですね、しっている

どころか、もしかすると、その人は、大海を追って、やってきたのかもしれない

「その人は、右目のしたに、ほくろが、ありましたか」

舟木は、柄にもなく、怯えた声できいた。

「ありましたよ。」

あんなに、くっきりとした泣きぼくろは、めったにないですから、よくおぼえて

います」

「真希だ」

舟木は、われしらず、大声をあげた。

そして、絶句した。

しばらく、みぞれのふる音だけがきこえた。

沈黙に耐えきれないという調子で、朝山が口をひらく。

「やってきたかいがあったというものやないか。」

それで亀さんや、その松本大海とやらは、いまどこにいるんや、どうもどこか

できいたことのある名前なんやけど、なっ」

「大海は、蒸発しました、大海は、仲間からスパイの嫌疑をかけられたのです。

いまにしておもえば、蒸発したのは、スパイうんぬんではなく、真希さんが原因

なのかもしれません」

「では、真希もいっしょに」

舟木は、ききたくない質問をした。

「それは私めの推測にすぎません。

真希さんと大海がいっしょだという証拠は、なにもありません」

「大海君のふるさとは、どこですか」

「それは、教えるわけにはいきません。

それにいいにくいのですが、もし真希さんが大海といっしょだとしたなら」

「いってください」

「すでに、この世に、いるとは、おもわれないのです」

三日、午後四時十五分。

小金井豊は、高杉京平と、墓地のなかで、対面している。

おたがい相手の臭気に閉口しながらも、あぐらの膝をつきあわせている。

小金井はすでに、自己紹介をおえている。

警察とはまったく関係ないともつげたが、蛇足だった。

京平は、そんなことはどうでもいいという風情で、淡々としている。

小金井は、腰に据えつけたた、隠しテープレコーダーのスイッチをおした。

できるだけわかりやすい言葉をつかい、できるだけはっきりとした声をだそうと、小金井は考えていた。

たとえ自分が京平に殺されても、会見テープだけが残ればいい、とさえ考えていた。

「君の目的をおしえてくれないか」

小金井は単刀直入にいった。

「目的は、殺すこと」

京平も端的にこたえた。

「それだけかい」

「そして、死ぬこと」

「君はやはり、噂の【死んだる団】か」

「【死んだる団】バンザイ」

京平は両手をあげたが、手には力がはいっていない。

腹痛がまだおさまっていないのだ。

相手の顔をめったに見ない小金井が、京平のことを凝視した。

奇妙なくらい、瞳の美しい青年だった。

「【死んだる団】の正体をきいてもいいかい」

「正体、正体だって。

そんなことしても、意味がないのは、新聞記事に意味がないのとおなじだ」

「記者を相手のせりふとはおもえないね。

意味があろうがなかろうが、正体をしりたいこととは、関係ない」

「正体なんて、ない、正体なんて。

あえていうなら、小金井さんの前にいる、おれっち、おれっちそのものが、【死んだる団】の正体だ」

「なるほど、わるい答ではないな」

小金井は皮肉っぽい笑いを漏らした。

「新聞記者って、ひとくちでいって、態度がでかい、だれもが、自分は社会の木鐸でございってツラしてる。

例外ではない小金井さん相手に、いい答はあげられない」

「喋りたくないことを、喋れなんていっていない、どうせ逃げられないんだから、最後っ屁で、喋りたいこと喋ればいいのさ」

小金井は、つっけんどんにいった。

京平の横柄なものいいにあわせて、本来横柄な小金井は、ますます横柄になっていきそうな自分をかんじていた。

京平は唇をひんまげて嗤い、

「逃げ切るつもりなんか、最初からない、おれっちは死ぬ予定なんだから。

丁度よかった、小金井さん、おれっちの最期をみとってくれないか」

「こんなところで死ぬ気かね」

「こんな、こんなところだって。

ここは天国でも地獄でもない、木も草も枯れ、土も空気も凍っている。

おれっちは西行ではないから、春の花のしたよりも、このちっぽけな白い荒野がおにあいだ」

「そんなものかね」

「小金井さんのインタビューがおわったら、すぐにここで切腹する。

どうやら下痢もおさまったようだし」

「なぜ、殺す、なぜ、死ぬ」

野暮な問いだとしりつつ、小金井はきいた。

一度くらい、インタビューされる側にまわりたいものだ、なんてことを漠然とおもいながら、小金井は京平の答を待った。

「あんたがたは、いつもそればかりだ、なぜ、なぜ、なぜ。

お偉い哲学者や心理学者は、上手に解釈してみせるんだろうが、おれっちにいわせれば、みんなインチキだ。

おのれが殺人してみなければ、殺人者の深層なんかわからない、おのれが自殺してみなければ、自殺者の深層なんかわからない」

「つまり、いまの君には、わかるってことかい」

「わかる気がするってとこかな」

「だから、その、するってとこを、ききたいんじゃないか」

話が噛みあわないとかんじたが、小金井は辛抱した。

「殺人は罪だ、そんなことは知恵おくれの小学生でも知っている。

人命は大切なものだ、そんなことはトチ狂ったヤクザでもわかっている。

しかし、殺人者の罪ばかりにこだわってはいは、真相は解明できないよ。

殺人はたしかにおそろしい、ふるえるほどこわい、反面ふるえるほどきもちいい。

おれっちが、この手でやるんだ、いいかい、相手は、ほかのだれでもない、このおれっちに、殺されるんだ。

相手は、おれっちに殺されまいと、必死になる、哀願もするし、土下座だってする。

おれっちは、もっともっと、ふるえる、おれっちの殺意が、殺意がふるえるんだ。

相手は、火事場のくそぢからの抵抗むなしく、おれっちに刺され、もたえくるしむ、断末魔のさけびを發する。

それでもしだいに、意識が遠のく、生命のみなもと、生命そのものの、最期のあらがいがあがる。

生命がきえる寸前、炎があがるくなるのとおなじで、あがるくケイレンするんだ。

おおきくケイレンする者もあれば、ちいさくケイレンする者もあるが、あがるい、厳肅なケイレン。

小金井さん、殺人の快樂にくらべれば、セックスの快樂なんざ、マリファナやLSDの快樂なんざ、女こどもの遊びとおなじだ。

自殺するのも、殺人とおなじなんだろうと、おれっちはおもう、自殺は、自分を殺すことだからね。

あのケイレンを、見るのではなく、感じるのだ、きもちよくないわけがない」「ある意味、不可思議な考え方だね」

「考え方、ではない、実感、といったほうがいい。

だいたい、不可思議を非難したいいかたは、ナンセンスだ、アンドレ・ブルトンは、〈不可思議のほか、美しいものはない〉といった、まったく、世間と美とは、反対語だな。

世間は、理屈をほしがる、結果には、必ず原因があるとおもいたがる、殺人には、動機があるべきだ、とね。 恨み、憎しみ、復讐、金が目的か、それとも政治的背景があるのか、殺人者の不孝な生い立ちも、大学受験の失敗も、青春時代の失恋も、関係がありそうだ、とか、なぜ、どうして。

世間にとって、解けないことは、不快なことなんだ、小金井さんは、世間とやらの代表者だな」

そんなことはない、君はしらないだけだ、と小金井はいいたかったが、余計な時間をつかうことになりそうなので、やめた。

「そうかもしれない、けれどもやはり、真実というものはあるんだ、どこかにね。

どこかにあるとしたなら、どこかをさぐり、真実を究明したい、それも人間の深層であり、人間のよさなんだとおもう。

神のみぞ知る、なんてのは、逃亡か諦念としかおもわれない。

あきらめることができない人間もいるんだよ」

「なるほど、小金井さんとおれっちは、反対語だな」

「そうはおもわない、もしかすると、たまたま立場とやらが反対なだけで、あるきだした方角が反対なだけで、あんがい、おなじタイプの人間かもね」

「小金井さんは、さすがに仕事柄、口が達者だ。

けれども、議論はしない、会談もうちどめ。

ぼちぼち、死ななきゃならない。というより、おれっちは、とつとと、とつとと、とつとと死にたいのよ」

京平は、ほほえんでいた。

瞳も、すがすがしかった。

いままで殺人をしてきて、これから自殺するらしい人間には見えなかった。
小金井は、気づかれないよう、テープを替えると、つぎの質問をあたまのなかで用意した。

三日、午後五時十分。

藤上吾郎は、新宿歌舞伎町のムービーBOXをでようとしている。
吾郎が小部屋にはいってから、五時間以上が経過していた。
小便は、小部屋内のくずかごにした。
不審がった店員がドアをたたいたが、吾郎は無言でたたきかえした。
なかでポルノ映画がかかっていることはまちがいないので、店員もそれ以上は文句もなかった。
おなじものをくりかえし観て、なにが面白いんだろうとおもっただけだった。
それでもさすがに、吾郎がでていくとき、店員は人相を確認しておこうとかがえた。
もし刑事でもやってきたら、いいところみせてやろうと、なにげなくおもったのだった。
けれども吾郎は、はいつてきたときと同様に、サングラスをかけマスクをしていた。
店員は、吾郎が長髪で、ひどいガニ股だということを、確認したにすぎなかった。
そして、小便臭い小部屋内を掃除した際に、血まみれのハンカチがのこされていたことを。
吾郎はそのまま、たそがれの街を、誰よりもゆっくり歩いて、西新宿方面にむかった。
なんども手をあげたのだが、タクシーがとまってくれなかったのだ。
それは吾郎にとって、計算外だった。
そしてこの十分ていどの遅れが、吾郎にとっては、不本意な結末につながることになる。

三日、午後五時半。

山風順一は、西新宿の高層ビル〈Kビルディング〉の屋上から地上を見おろしている。
高性能の双眼鏡で視ている。
通行人ひとりひとりの顔まで、それなりに見える。
花井刑事は、隣の五階建てのビルの屋上にいる。
そのほか、工事中のビルにまで、刑事や警官が配備されている。

花井刑事から無線がはいり、歌舞伎町のムービーBOXから、不審な男がでたとの情報がはいったとのこと。

長髪の若い男だときくと、山風は藤上吾郎だと確信した。

五時半をすぎたなら、〈Kビルディング〉のみならず、あちこちのビルの玄関は、退社するサラリーマンであふれかえる。

もしやるなら、この混雑時をやつは狙うにちがいない。

山風は全身を硬直させて、双眼鏡にはりついた目をみひらいた。

一分一秒がはやくすぎさる。

黄昏ももうすぐおわる。

まだ藤上吾郎の姿はみえない。

このままではいずれビルは閑散とする。

今日はみおくれたのかもしれない。

とおもっていると、花井から無線がはいった。

花井のいう方角に双眼鏡をむけた。

(やつだ、藤上吾郎がきた)

サングラスとマスクで顔はわからないが、藤上吾郎だと確信した。

こんなに的確に推察が当たったことは、長い刑事生活でも数えるほどしかない。

山風は花井に手で合図をおくり、エレベーターまでつっぱした。

のぼってくるときは早いとかんじたエレベーターが、やけに遅くかんじた。

玄関にとびでてみると、吾郎がいままさにはいってこようとしていた。

山風は、ガードマンより先に、吾郎に接近すべきだとかんがえた。

それがいけなかった。

こぼしりになった山風に気づいた吾郎が、すばやく背中をむけたのだ。

山風はとびかかった。

学生時代ラグビー選手だった体験が、こういうときに活きるのだ。

だが今回は、失敗した。

山風は、吾郎のシューズをつかんだにすぎなかった。

吾郎は山風にもぎとられた、片方のシューズをのこして、はずみながら逃げた。

とても、尻の穴に爆弾をうめこんだ者のはしりではない。

かけつけた花井とともに、山風は追った。

つと、吾郎の逃げ足がゆるんだ。

なにか体内に異常があったふうに、山風にはみうけられた。

差がみるみる縮まった。

すると吾郎は、サングラスとマスクをはぎとって投げすてると、ふりかえって、笑った。

いっしゅん山風がたじろぐほどの、不気味な笑いだった。

吾郎は、すばやく見回すと、公衆便所にとびこんだ。

山風と花井もとびこんでみると、大使用はひとつしかなかった。

ドアをひっぱったが、とうぜんカギをかけている。

ドアをたたいたが、吾郎の反応はない。

烈しい息づかいだけがきこえる。

「扉をこわせ」

山風が花井につよく命じた。

花井は扉に、二度三度と、体当たりをかました。

「駄目です、おもったより頑丈です」

「やつは袋の鼠だ、あとは時間の問題だ。

おれが見張っているから、花ちゃんは応援をよんでくれ」

「了解しました」

花井は便所の外にでて、無線で警官をよぼうとする。

「いやまて、応援はやめておこう、危険な目にあうのは、おれたちだけでたくさ
んだ。

それよりこの扉をこじあける用具がほしいな」

「調達してきます」

花井がかけだしてゆくと、山風は拳銃をぬきとって、安全装置をはずした。

三日、午後七時

小金井豊は、高杉京平がおこしてくれた焚火越しに、カメラのシャッターをきりつづけている。

日はしずみ、月もでていない。

どこからか、山犬の遠吠えがきこえる。

「墓地で火とフラッシュをたいていたんでは、すぐに見つかってしまうな」

小金井がいうと、京平は次々と枯木をほうりこみながら、

「警察や自警団や青年団の山狩りも、日がおちたらやらない、夜の山がこわいこ
とは、連中がいちばんわかっている。

おれっちの居場所はわかっているはずだが、山狩りは早朝からと相場がきまっ
ている」

「だがこの焚火は、かなり目立つだろうよ」

「墓場の火はだいじょうぶ、人魂だとおもうからね」

「そんなもんかね、君も山育ちかい」

「これから死ぬ人間に、身上調査は野暮だね」

「やはり君は、今夜中に死のうとしているわけか」

「今夜中、今夜中ですって。

そんな暢気者じゃないよ、おれっちは」

「これから死のうって人間が、火にあたるかねえ」

「手がかじかんで、短刀もにぎれないんじゃ、情ないからね。

それにもうじき、雪がふってくる」

「なるほど、雪を、死ぬきっかけにするのか。

あんがいロマンチストだな」

「ロマンチストでない殺人者なんて、いないよ」

いってから京平は、いちばん近くの墓石をながめ、自嘲気味に笑った。

小金井は、京平に興味以上のものをかんじていた。

仮に、死にきれずに、逮捕されたとしたら、そのあとではおそい。

京平の本音がきけるのは、いましかない。

そしてもしかすると、いま目の前にいる若い男は、自分がかつて会見した、いろんな分野のどんな人物よりも、はるかに凄いやつかもしれないのだ。

あれこれかんがえながら小金井は、なんとか質問をくりだして、なんとかこの会見を長びかせたかった。

「六〇年に、社会党の委員長だった浅沼稻次郎を、刺殺した青年を、君は知っているよね」

「山口二矢だろ。」

あのときおれっちは小学生だったが」

「君は、あの山口が、理想なんじゃないのか。」

殺す。そして、死ぬ」

「いいや、おれっちは、鑑別所で首をくくったりするのは、ごめんだ。」

さっきもいったけれど、自分を殺すのは、快樂だ。

その快樂をより高めるためには、時と所ととを選ぶ必要がある」

「それで君は、それらをすでに、選んでしまったというわけか」

小金井は周りをみまわしたが、雪はまだふってはこない。

「そういう、わけ、だよ」

京平は「わけ」というところを、嫌味っぽく強調してこたえた。

「山口だって、選んだんじゃないかな、テロリストの死にざまを」

「テロリストなんて、くそくらえだ」

「なら、暗殺者と呼ぼうか。」

朝山完吉の『暗殺論』にいわく、テロリズムというものは」

「ちょっと待って、おれっちだって、『暗殺論』くらいは、いちおう読んでいる。」

小金井さん、かんちがいされては困るよ、おれっちには、自民党も共産党も、右翼も左翼も、大袈裟にいうなら、政治も思想も、なんにもないんだ」

「それでも君が、現職の頭取と大臣を刺殺したのは、事実だ」

「では、ちがう言い方をするよ。」

おれっちは、もしあのふたりの肩書きが、医者だろうが教師だろうが社長だろうが、刺していたね」

「歌手でも作家でもボクサーでもか」

「むろん」

「しかし君、乞食とか浮浪者だったら、刺さないな」

「乞食とか浮浪者は、肩書きではないからね」

「よし、私もちがう言い方をしよう。」

家庭では、優しい夫であり、素敵な父親であり、大切な大黒柱であつてもか」

「むろん」

断言した京平の両眼が、炎を映して赤くひかった。

ようやく殺人者の眼になった、と小金井は感受した。

「君は君に殺された者の、家族の気持ちをかんがえたことがあるかい、あるはずないよな」

常識的な内容を、小金井はわざと挑戦的な口調でいった。

京平は、動じるふりすらしなかった。

「そういうことは、おれっちの、いわばこころのなかの問題で、こころのなかなんか、自分でも簡単にはわからない。

おれっちがもし、かんがえたことはある、と答えれば、小金井さんは満足し、鬼の目にも涙、なんて見出しをつけるんだらうな」

「なあに、きいてみただけさ」

「小金井さんはインテリだらうから、とうぜんこんな言葉はごぞんじだよね。

いわく、親はなくとも、子は育つ、いわく、親があっても、子は育つ、いわく、家庭の幸福、諸悪のもと」

「まったく、君みたいな人間が、どうしてできたのか、そこんところを、いちばんしりたいもんだね」

小金井はこんどは、得意の皮肉口調でいった。

京平の両眼が、さらに燃えあがった。

「くだらない質問だな、人間はカクテルじゃないんだから。

もしおれっちが、片親育ちだったり、ひどく貧しい幼少年時代だったりすると、あいつの人間形成は、そのせいだって、きめつける気だな。

ジャーナリストはいつだってそうだ、あんたがたは、多数決の世界に与した人たちだものね、無知なのはしかたない。

世界中の人間のなかで、数億分の一の確率で、命をおしまない人間、自分の命も、他人の命もおしまない人間、そんな人間がいるってことは、あんたがたには理解不能なことなんだろうよ」

「命を軽くあつかってはいけない、命は尊いものだ、そんなことは、虫けらだって、生身のからだでわかっていることだ」

「誤解だな、命が軽いなんて、ひとこともいってはいない。

命はかぎりなく重いものだ、おれっちは、その重い重い命を、まるっきり惜しまない人間だ、そういったんだ」

「殺人鬼のへりくつか」

小金井は京平の両眼に負けまいと、するどく睨みつけていった。

「人間のいいぶんだ」

京平も烈しく応じた。

「【死んだる団】のいいぶんか」

「おれっち一個の思想だ」

「君の妄想は、元気いいなあ」

「小金井さんの妄想は、空元気かな」

「生意気ないいぐさだね、

君はだまって死ぬべきだ、君は魅力的な存在感があるけれども、口をひらくと、鼻もちならない青二才になる」

「勝手なこといいなさんな。

おれっちに喋らせているのは、小金井さんじゃないの、三流新聞の、目立ちたがり記者」

「君の次のターゲットは、どうやら目の前の、記者という肩書きをもつ男になりそうだな」

「わかってないね、おれっちは、巨大なブタしか殺らない。

小金井さんは、まだかわいい子ブタちゃんだ」

京平は、歯をむきだして笑った。

つられて、小金井も腹から笑った。

(もしかすると、こいつは、おれに似ている)

そうおもうと、死なせたくはなかった。

笑いつづけたまま小金井は、

「暗殺者の笑顔は妙に美しい」という、『暗殺論』の一節をおもいうかべた。

「暗殺者には闇がよく似合う」という、一節もおもいうかべた小金井は、ゆくりなく暗黒になろうとしている空を見あげた。

いまにも氷のかたまりが、おちてきそうな夜空を。

三日、午後七時半。

山風順一と藤上吾郎は、便所の扉一枚をへだてて、対話をしている。

まずは花井刑事が、便所の扉をこわす用具を調達してもどるまで、時間かせぎをしなければならない。

吾郎の烈しい息づかいが鎮まるのをまって、山風が声をかけると、意に反して吾郎はあっさり応じてきたのだ。

とりとめのない話はすんで、いよいよ本題だと、山風は身構えた。

「君、過激派だろ、どこのセクトか、おしえてくれんかね」

「あんたらデカは、いつもそうしたレッテルをはりたがる、そんな発想しかできんのかい。

おいらは、一匹狼じゃ」

「じゃあ、一匹狼さん、あのビルを狙った理由を、おしえてくれんかね」

「あんたはあそこで、待ち伏せしてたんだろ。

そんなら、理由とやらは、あんたもわかっているはずじゃねえか」

「それは理由とは関係ない、おれの長年のカンというやつだ。

しかも刑事にとっては、ほめられるほどのカンでもない」

「てえしたカンだな、それぐらい上等なデカなら、理由なき反抗ってやつがあることぐらい、わかるだろうよ」

「それがおれにはわからんのだが、まあいい、べつの質問に答えてくれ。

君は、尻の穴に爆弾をうめこんで、ビルといっしょに、ふっとぶつもりだったのかね、それとも、そこはただの隠し場所かい」

「臭いところで、臭い話はやめてくれ。

このブツの破壊力はハンパじゃない、おいらの糞なんか、まんず、素粒子になっちまう」

「どうして死のうとするの、まだ十七歳じゃないか。

君は少年法で守られているんだよ」

「あんた、ムスコはいるの」

このときだけ、吾郎の声の調子がおちた。

山風はまだ充分時間かせぎはできると踏んだ。

「いるよ、君とおなじ歳ごろさ」

「あんた、ムスコのこと、わかっているの」

「そのつもりだよ、すくなくともおれの息子は、君みたいに命を粗末にしたりはしない」

「その答で、おいらにはよくわかったぜ、あんたはムスコをまったくわかっちゃいないねえ。

たとえばさ、ふるい話だなんていうなよ、たとえば、神風特別攻撃隊のメンバーはさ、命を粗末にしたんかい、そう単純にいいきっていいんかい。

敵に体当たりするってことはよ、まんず、命がもえることなんだよ、もえるんだ、もえあがるんだよ。

命をもやすことが、命を粗末にすることだとかんがえる、オヤジをもったムスコは、あわれだね」

「あわれかどうか、今晚かえったら、息子と語りあってみるわ」

山風は、娘はいるが、息子はいない。

「あんた、わるい人じゃなさそうだな」

「わるい人の、刑事なんかいないよ」

「だとええんだが」

「とにかく、はやくかえられるようにしてくれよ、ひさしぶりに家族と晩飯をくいたいんでね」

「そんならおいらにかまわずに、さっさとかえったほうがええぜ。

タイマーのスイッチをおしちまってるから、あと五分たらずで、どかん、だ。

あわれなムスコが、オヤジをうしなって、よけいにあわれになっちまう」

「どうしても、君は死ぬつもりか、考えなおせ、君の計画は失敗したんだよ、あきらめるってことも、勇気なんだよ。

いくらでもやりなおしのきく若さじゃないか、便所なんかで死んでは、犬死にだぞ」

「狼は犬死にしたってええけど、イヌが犬死にはみっともないぜ、はやくひきあげちまいな。

イヌ野郎に幸運を」

「もし犬死にしたら、君の人生は、いったいなんだったのだ」

吾郎はしばし、嗤いをこらえてから、

「あんたも呆けた文化人とおんなじだな。

連中は名が売れると、かならずいいだすんだ、生きるとはなにか、人生とはなんぞや、ってね、おまけに本までだしやがる、そんな愚にもつかねえ本で、本屋の棚はきしんでいるのさ。

連中はけっきょく、自分と自分のまわりのことしか見てねえんだ、あのビルに生息する、サラリーマンとおんなじよ。

世界にはさ、空気をすうのが好きだから、生きている者もいるし、空気をすうのが厭だから、死ぬ者もいるのさ、戦争が好きだから生きている者もいるし、平和が厭だから死ぬ者もいるのさ、一匹の虫のために命を賭ける者もいるし、一杯の飯のために命を惜しむ者もいるのさ、命がけで一本の花を守る者もいるし、命がけにならなくとも百万本の花をふみにじれる者もいるんだぜ」

吾郎が語るあいだに、山風はロングピースに火をつけた。

べつだん、タバコの煙で、藤上吾郎をいぶりだすためではない。

「なにをいっているのか、わけわからんが、おれはどうにも、若い人が死ぬことに耐えられんのだよ、な、生きる、生きてさえいれば、いずれ、タバコもすえる、酒ものめる、生きてさえいれば、かんがえも変わる。

だれかがいっていたが〈歳をとるといふことの尊重に人間の知恵がある〉。

君がなんといおうとも、君はまちがっているんだからね」

「ええオヤジだ、のんきな父さんだ、デカにしとくのはもったいない。

ええか、あんたは死人に、生きかえれって説教しているんだぜ」

「わかった、もういい、遺言をきこうか」

「おいらは身寄りがないから、遺言はいらねえ。

けんど、あと二分あるから、気まぐれで、ひとつだけ土産話をのこして逝くかな」

「すきにしろ」

「あんたは犬みてえなツラしてるんだろな、秋田犬ならええんじやが」

「その捨てぜりふが、冥土の土産かい」

吾郎はまた嗤ってから、

「京都で、偉大なる殺人が実行される。

首相が暗殺される以上の、その大仕事をやるのは、おいらが唯一尊敬する、辻中亀夫」

「あの全共闘の辻中か」

「おいらは失敗したけんど、辻中さんは失敗はしねえ」

「辻中は京都のどこにいるんだ」

山風はどなった。

「それをしらべるのが警察だろが、まあいい、嵯峨野の清水印刷だ。

上等なデカのあんたが、いまさらかけつけても、まんずまにあいっこねえ」

「おい、ちょっと待て、もっとくわしくおしえてくれ」

山風はあとずさりしながら叫んだ。

「【死んだる団】バンザイ」

吾郎の絶叫が、便所のそとまでひびきわたった。

三日、午後八時十分。

花井健太は、十一名の警官を誘導して、公衆便所にちかづいている。

たそがれはおわり、闇が便所を包囲している。

藤上吾郎の絶叫に、花井は不吉なものをかんじたが、山風刑事がなかにいることを知っているのので、警官たちを待機させると、自分はドリルを手にして、なかにはいっていかうとした。

そのときだった。

烈しい音がして、とっさに花井は身をふせた。

大砲の音にも似ていたし、車がパンクする音にも似ていた。

顔をあげると、こんどは便所の入口から、すさまじい閃光とともに、ものすごい突風がおそってきた。

花井ははじめての体験だったが、それらが爆音であり爆風であるとわかった。

「山さん」

と叫んだつもりだったが、からだのどこかをやられたらしく、声にはならなかった。

そして、ひととき、花井は失神した。

目をさましたとき、目前に瓦礫の小山があり、警官たちが作業をしていた。

「山さん」

と、こんどは声高に叫ぶと、瓦礫のてっぺんに立っていた警官が、首を横にふった。

三日、午後八時半。

朝山完吉は、酒をのみはじめている。

朝山のたのみで、辻中亀夫が近所の農家から酒をもらってきたのだ。

舟木英介は、亀夫に湧かしてもらった白湯をのんでいる。

「貴君の気持ちはわかるが、亀さんが松本大海については、なにも語れないといつとる以上、しかたなかろう。

それよりも本題にうつったらどうや、なっ」

呂律がまわらなくなりかけている朝山にいわれると、舟木はせかされている気分になった。

(もしかすると、その松本大海という青年は、松本玄信の関係者ではないのか)

そのおもいをいったん抑えて、山内参三からわたされた質問メモをとりだした。

「ずばりききたいのですが、【死んだる団】とはなんですか」

「【死んだる団】なんて、ほんとはなにものでもないのです、だれが名づけたのかさえ、しりません、それでも、そう呼ばれているし、そう呼ばれる仲間もいる、自分でそう呼んでいる者さえいる。

勝手に一人歩きしているというところでしょうか」

亀夫の内心はともあれ、表情はたしかに困惑していた。

「一人歩きにせよ、あるいているのはまちがいありません。

さっきも口走りましたが、ぼくがきいたところによると、辻中亀夫さんは【死んだる団】の独裁的な団長で、超カリスマ、一人一殺、ではなく一人百殺、百人殺すと、ようやく役目終了で、自殺する」

あえて舟木は、亀夫を刺激するために、大袈裟にいった。

「いやはや、私めが団長ですって、カリスマですって、面白い冗談ですね。

あなたがたにも、そう見えますか」

「見えない、といたら、嘘になります」

舟木が断言すると、半分眠っている朝山が、

「そうや、そうや、見えないものでも、見える」

と相槌をうった。

「まいりましたが、しかし噂というものは、おそろしいものです。

一人百殺、ですか、それだけ殺せば、勲章をもらえますね」

亀夫は冷たくなった煎茶をのんで、渋い表情をつくった。

それはもちろん、お茶が渋かったからではない。

「この件も、語ってはもらえないのですか」

舟木は、山内さんへのいいわけをかんがえなければ、とおもった。

「私めは、噂も嘘もきらいです。

正直に話しましょう、【死んだる団】と、自称さえしている仲間たちのことを」
みるみる亀夫は、表情をかたくした。

「それではぼくも正直にいうとして、依頼人は、売れっ子のライターなのです。

あなたの話、記事になってもかまいませんか」

「記事になるころには、私めはこの世にいないでしょうから、いっこうにかまいません」

平然と即答した亀夫を、舟木は不思議な気分で見つめた。

三日、午後八時五十分。

山内参三は、くわえタバコで、電話のダイヤルをまわしている。

なんどやっても話し中だ。

さいごのつもりで、ダイヤルをまわす。

ようやく相手がでた。

「麻暮正作だったら、きのう死にましたよん」

殺伐とした声でいって、相手は電話をきろうとした。

「おいおい、まてまて、おれだおれだ」

「おれなんて知り合いは、おりません」

また電話をきろうとした。

「山内だ、山内参三だ、正作さんの金づるだよ」

「なんだ、参三さんですか。」

さんさんさん、麻暮正作は、生きかえりましたん、ケケケ」

麻暮の、金属的な笑い声は、健在だった。

この笑い声をきくと、なぜか山内はうれしくなる。

「あいかわらずだなあ、また女と長電話かい」

「ふられる女もつらいが、ふる男はもっとつらいもんですん」

「性懲りもなく、どこの馬の骨かわからん牝馬の尻を、おっかけているんだらう」

「こんどの牝馬は、馬の骨よりも歯ごたえがあるん。

ボクは、歯ごたえのある女にしか興味はないん。

歯ごたえのある事件にしか、興味がないのとおなじですよん」

「偉そうにいうな、一年間も依頼がこないのどちがうか」

「歯ごたえのある女も、歯ごたえのある事件も、骨が折れる、歯も折れる。

しかし、歯も折り、骨も折るのは、ボクの仕事ですからねん。

もしや、折れない依頼を受けるボクだと、とおもっているんじゃないでしょうねん、ケケケ」

「冗談はそれくらいにしてくれ、折れる仕事だ」

「それなら折れてもいいが、依頼人はどこのだれでしょかん」

「おれだ、さんさんさん、だよ」

「莫迦をいいなさんな、ボクがお高いのは、ごぞんじでしように」

「おれの年間の印税額は三億円だよ。

そういえば正作さん、おれを〈三億円事件〉の犯人扱いしなかったっけ」

「あれは単なるヤキモチから発した、冗談だよん」

「依頼金の心配はしなさんな、おれが約束をたがえたことが、かつてあったらうか」

「一九六八年の、あの事件。

ボクは医療費を、いただいてないんじゃないん」

「それはつまり、正作さんが不死身だってこと、知っているからさ。

こんどの件も、不死身で腕が立つ探偵にしか頼めない」

「舟木英介君に頼んだじゃん」

「地獄耳か。

舟木君と正作さんとは、キャリアがちがいすぎる、伝説的な私立探偵とくらべちゃ、舟木君がかわいそうだよ」

山内はできるかぎり、真剣な口調をつくっていった。

麻暮がおだてにのりやすいことを、よくわかっていた。

「ボクの性格、しつとるやつにはかなわん、豚もおだてりゃ木にのぼる、そうし

んじとるやつにはかなわん」

「ひとまず話をきいてくれないか」

「承知しました、さんさんさん、ケケケ」

三日、午後九時。

立花雪絵は、新宿歌舞伎町にいる。

バッティング・センターの金網に顔をおしつけている。

三人のサラリーマンが無心でバットをふりつづけているのを、見るともなく見ている。

藤上吾郎が、一キロとはなれていない公衆便所で自爆して、まだ一時間ほどしか経ってはいない。

ボールがバットにはじきかえされる音の連続にまじって、渋滞している車のエンジンの音、バーの客引きのドラ声、これからコンパにむかう大学生たちの嬌声。

そんなものに包まれて、雪絵はうごかない。

もしハサミをもっていたなら、だれでも切りたくなるであろう、つややかな長い髪。

もし年ごろの女性なら、秘伝をききたくになるであろう、完璧な化粧。

もしこのすがたのままにいたなら、三十分で風邪をひきそうなドレス。

カラーは、いま流行りの〈サイケデリック〉に、一色足りないというところ。

色も形も、ドレスとまったく不釣り合いな、ルイ・ヴィトンのハンドバッグ。

むきだしの腕と脚。

さらに、むきだしの胸と背中、雪がふってきたなら、白さの競争ができそうだ。

このあたりは、この時間から立ちんぼの娼婦が出没するが、まず娼婦にはましがえられることのない、気品すらたどよう物腰。

落ちついた風情は、まだ二十四歳だが、二十七歳に見える。

それでも、だれか声をかけるのが、おそすぎたくらいだ。

その男は、スーツ姿に、ウール・コートをはおり、薄い髪を整えられるだけ整えた、五十がらみの、会社役員というふんいきの、なかなかの初老紳士。

いささか派手な、ネクタイをむすびなおし、気のきいたせりふのつもりで、

「お嬢さん、私のこのコートは、あなたを包むために着てきたのですよ」

と、今年いちばんの優しい声でよびかけた。

雪絵が、微動だにしないので、紳士は、今風なせりふにすべきかとかんがえた。

「ラブ・エンド・ピースの時代を、おうかしませんか」

残念ながら紳士は、〈ラブ&ピース〉の意味も、謳歌の漢字もわかっていなかった。

それでもこの言葉に、雪絵が反応したので、紳士は調子にのって、

「お嬢さん、私のバットも、一見の価値はありますよ、やや古い型ですがね」

紳士にも、ためらいはゼロではなかった。

が、このチャンスをのがしたら、後悔の種になるという助平ごころと、さきほど寿司屋でのんだ一本のビールが、蛮勇を後押ししたのだ。

そしてこの、助平ごころと蛮勇が、一時間後の惨劇を、約束することになる。

三日、午後九時十分。

麻暮正作は、三日月型の椅子にふんぞりかえり、山内参三からの電話に、まだ耳をかたむけている。

麻暮のくわえたパイプのけむりが、三角錐の部屋の頂上めがけてのぼってゆく。満月に似た小窓がひとつあるが、そこから月は見えない。

冷ややかな黒塗りの壁に、チャップリンの等身大のポスターが貼ってある。

古い山高帽に、だぶだぶの燕尾服、手にステッキ。

だから、世田谷の〈麻暮私立探偵事務所〉に、はじめてはいった者は、おそらくだれもみな、チャップリンがふたりいる、と錯覚するだろう。

おそらく、というのは、まだなんびとも、この部屋にはいった者はいないからだ。

酸欠になりそうな、澱んだ空気のなかを、エンドレスのBGM（映画『ライムライト』のテーマ曲）がしずかにながれる。

美空ひばりの『河童ブギウギ』にしようか、迷いに迷って、自分は周りという河童よりも、チャップリンに似ていると確信して、これに決めた。

つと、麻暮の目がつりあがり、

「なんだと、【死んだる団】」

と叫んだ。

「なんだ、正作さん、しっていたのか。」

「パリで理容師をしていたわりには、ものしりなんだな」

「いや、はじめてきいた。」

「なにせ、ボクはパリで漁師をしていたからねん」

「じゃあ、どうして、叫んだんだい」

「受話器のむこうの、山内の不審げな声を無視して、」

「【死んだる団】か」

と麻暮はくりかえした。

「心当たりが、あるんじゃないのかい」

「あんたはさっき、だれかの名前を、くちばしっていたねん」

「ああ、辻中亀夫の名前だったら、正作さんもしっているだろ」

「それも、じつは、しらんのよん」

「よくそれで、探偵やっつけられるな」

「その辻中亀夫、そして【死んだる団】。」

「それらは荒野大三郎とは、無関係なのかなん」

「荒野、大三郎とは、はじめてきく名前だね」

「ボクの半生で、最大最強の敵さ。」

ボクの義理の弟でもあった、世界でいちばん不吉な男。

だが、ボクは勝った、ボクは【D】を破壊し、荒野を自決においこんだ。

それで、だれもごぞんじない、世紀の大事件はおわったのよ。

ケケケ、あんたにボクの快刀乱麻の大活躍を、お見せしたかったな。

だが、この大事件にかかわったせいで、大切な妹は爆死させられ、大三郎のオヤジの大造に、ボクは半殺しにさせられた。

妹はボクの反対をおしきって、大三郎と結婚していたんだ。ボクはバリに逃亡し、そこで現地の女と暮らしたのよん。

こどもが生まれ、ありがたいことに三つ子だったから、ボクは美しい妻と、可愛い三匹の子豚のために、精進をかさね、超一流の漁師になったのよん」

「おいおい、おまえさんの身の上話をきいてる暇はない、【D】とか大三郎とか大造とか、わけがわからん。問題は【死んだる団】と辻中亀夫だ」

山内のあきれん声が伝わってきても、麻暮は自分の話をやめるつもりはない。

どころか、その語り口はしだいに凄みを増す。

「参三さんよ、鈍いあんたにゃわからんだろう、ボクがどうして、超一流の漁師たることをやめ、再び私立探偵として復帰したのかを」

「正作さん一流の、気まぐれだろ」

「バリにおる理由が、なくなっちゃまったのさん。

なぜって美しい妻と可愛い三匹の子豚を、残忍な狼に、みんな食われてしまったんでね、ケケケ」

「初耳だ、ほんとなら、笑い事じゃないだろ」

「ケケケ、笑うしかないはずの事だった、語れるはずのない事だった。

それなのにボクは、ダイヤモンドより硬い沈黙をやぶって、告白をしている。なぜだかわかるかい」

「それがわかれば、探偵になっている」

「【死んだる団】がなにを意味するのか、今それはだれにもわからない。

だが、この名称を耳にしたとき、ボクはなぜか【D】を連想し、荒野大三郎のニオイをかいた。

しかもこのニオイはワキガよりも強烈に、耳から鼻に伝わってきたん。

ケケケ、荒野め、やはり死んだとみせかけて、臆面もなく生きておるな。

生きていたとなると、ボクの妻子を殺したのは、やつめのしわざにまちがいない」

「ますますわからん、おまえさんが喋れば喋るほど、よけいにわからなくなる」

「それでいい、鈍いあんたにゃ説明は要らない」

「鈍いから、説明要るだろうが」

「荒野大三郎め、こんどこそ、きっちり始末をつけてやるからな、首をあらってまっぴろよん」

「けっきょく、どういうことになるんだ」

とうとう山内は、困惑の叫びを發した。

「けっきょく、依頼は受けるということよ。

ボクは麻暮正作だよ、ホームズよりもステッキで、マーロウよりも固茹で玉子で、ポアロよりも髪の色がある」

ここで麻暮は屁を三発はなつた。

放屁は、麻暮の自信の顕れだった。

「ただ、まちがえないでくれ。

おれが依頼したのは、【D】でも荒野何某でもない、【死んだる団】と辻中亀夫だよ」

応えずに麻暮は、間をおいてから、

「参三さん、きのうの朝の事件はしっているよねん」

「見延山久遠寺のやつだろ。

おれだって、まがりなりにもライターさ、あの事件が、単純でないことくらいはわかる。

裏を見逃したなら、迷宮入りだろうが」

「裏とは」

「たとえばだが、〈愛信会〉の教祖、日下典禪」

「ケケケ、あんたも探偵になれるよん」

「茶化すなよ。正作さんの見解はどうなんだ」

「夫と妻とその愛人、よくある三角関係パターンだが、心中はない、心中なら、もっと儀式的になる、というのがボクのかんがえよ。

夫が、妻とその愛人をつきおとしたのか、愛人が、夫とその妻をつきおとしたのか、妻が、その夫とその愛人をつきおとしたのか、ボクは犯人は愛人だとかんがえている。

こまかい話で恐縮だが、石段の上から数えて、夫は七十二段目、妻は六十五段目で死んでいた。

愛人は百四十七段目だ。

これは、愛人が、ふたりを最上段からつきおとし、石段をおりて、ふたりの死を確認したうえで、自分はその地点からとびこんだ、というカタチなのだよ。

そんなことよりも、いちばんの問題は、殺したあと即座に、自殺しているって点なのだよん」

「なら、あれも【死んだる団】」

山内は、うわずった声をあげた。

「【死んだる団】とは、まさに【D】の総帥、荒野大三郎がつけそうな名称だ。

それと、殺す、そしてすぐ死ぬ、このカタチにこだわっているのさ。

荒野大三郎がこのむカタチにねん」

「いやはや、また荒野何某」

「これからいう、ボクのひとつことをきいたなら、そんなうんざりした声は、だせないはずだがねん」

「きくまえから、うんざり」

「荒野大三郎は、変装の名人なんだよ。

そして日下典禪の、あの目。

みんなはそれをしているけれども、あの目が、荒野大三郎の目、そのものだってことは、だれもしらんだろ」

電話のむこうで、うんざりしているはずの、山内の絶句。

「神のごとく、と皆によばれる、まなざし、悪魔のごとく、とボクがかんじる、瞳の奥の光」

「つまり、正作さんは、【死んだる団】も辻中亀夫も、〈愛信会〉も日下典禪も、その【D】やら荒野何某やらと、つながりがあるというんだね」

「つながりなんてレベルではないねん」

「辻中亀夫は、京都嵯峨野にいるんだ」

「京都へは手下を送る、ボクは秩父だ、〈愛信会〉をさぐる。

トータル五日でいい、五日間ですべて、ボクはかたづけるよん」

「かたづけなくてもいいから、たのんだぜ、軍資金は明日ふりこんでおく」

山内が電話をきり、麻暮は腕をくむ。

顔をあげ、小窓を見るが、灰色の闇が在るだけだ。

麻暮は、その闇を凝視しつつ、

「これが、はじまりだ」

とつぶやいた。

おもむろに奥にすすむと、そこにしつらえてある仏壇に手をあわせる。

仏壇のなかに写真があつて、エキゾチックで美しい母親と、同じ顔をした愛らしい三人の幼子が映っている。

いつまでも手をあわせている麻暮の背から、妖気とよぶほかないものが立ちのぼっている。

瞑目していた麻暮の両眼が、烈しく見ひらかれると、血の涙がしたたりおちる。

三日、午後九時三十分。

高杉京平と小金井豊は、まだ焚火をはさんで、むかいあっている。

焚火の炎が弱くなってきた。

京平は、もう枯木をほうりこもうとはしない。

小金井のテーブルも、のこりすくなくなった。

「このへんで、おつきあいをおわらせてくれないか」

この京平の声が、森林に木霊し、小金井は、遠からず起こる出来事の予感に戦慄した。

京平は、手にした短刀を逆手にもちかえた。

ジーパンのベルトをゆるめ、前チャックをおろした。

「おい、待て、待て」

叫んだ小金井の、強い息が、焚火に吹きかかり、いっしゅんだけオレンジ色の

鋭い炎が立った。

無駄とはしりつつも、京平に矢継ぎ早に質問をあびせる用意をした。

だが、京平に先をこされた。

「Q&Aは、もうやめにしよう。

おれっちはあんたが嫌いじゃない、どころか、見られてあることの、恍惚と不安、おれっちの最期をみとどけてくれる唯一の人間が、あんたであることを幸運にすらおもっている。

《死は愛欲の真理である》、このジョルジュ・バタイユの言葉はしっているよね、これはおれっちの実感でもある】

「しらん、しらん、いいだろう、質問はよそう。

これはひとりごとだ、不可解な人間に接してしまった者の、つぶやきにすぎん。

その人はいう、過去の体験は関係ないと、それならば現在、その人に影響を与えた思想なり人物がいるはずじゃないか、それはなんだ、それはだれだ、マルキシズムか、マゾヒズムか、チェ・ゲバラか、北一輝か。

それとも【死んだる団】に、おそるべき黒幕がいるのか。

謎だ、謎だが、この謎は、魅惑的だ」

それから小金井は、

「だろ」

と、きくともなくきいて、上目づかいで京平を見た。

「【死んだる団】は、おれっちだ」

これが、高杉京平の最期の言葉となった。

京平の短刀が、京平の腹につきこまれた。

それがあまりにも自然の動作だったので、小金井はおしとどめるタイミングを逸してしまった。

腹にめりこんだ短刀を、京平は素早く上下左右にうごかした。

切腹の所作ではなく、単に己の腹をもてあそんでいるふうに、小金井には見えなかった。

京平が、うなった。

苦痛のうめきにもおもわれたし、歓喜のさけびにもおもわれた。

おもわず小金井は、カメラに手をかけたが、そのしゅんかん、京平になにかを投げつけられた。

生ぬるい不気味な感触に、小金井はちいさく叫んで尻餅をついた。

その拍子に焚火をけとばすと、瞬時に京平のジーパンの裾がもえあがった。

それにかまわず、京平は凄まじい形相で、くりかえし投げつけてくる。

その生ぬるい不気味なものが、京平のはらわたであるとわかったとき、小金井は血の気がひき、からだの力がぬけた。

カメラが焚火の真ん中におち、あわててかきだしたとき、京平の上半体が、スローモーション・フィルムさながらの速度で、焚火におおいかぶさってきた。

血のこげる臭いが、あたりに充満した。

三日、午後十時。

立花雪絵は、新宿歌舞伎町のラブホテル〈H〉の受付の前にいる。

初老の紳士と、301号に入室して、三十分後だ。

受付嬢、というほどは若くない婦人に、雪絵は声をかける。

「連れが眠ってしまいましたので、先にでます。

一時間ほどしたら、起こしてあげてくれませんか。

そのころには酔いもさめるとおもいますから」

「困ります、退室はカップルごいっしょというのが、この業界のキマリなので」

婦人は用心棒をよぶつもりで声を荒げたが、雪絵はもう外へでていた。

婦人は追いかけず、顔や服装をしっかりと確認できたことに満足した。

三日、午後十時十五分。

花井健太は新宿署にもどっている。

先輩であり、刑事の師とよんでもいい山風順一の椅子に座って、腕組みをしている。

瓦礫の山のしたから、人間の多数の肉片が発見された。

だが、こまぎれ肉をどう寄せあつめても、ひとり分にしかない。

つまり、藤上吾郎か山風順一の、どちらかのものなのだ。

藤上吾郎が活着ている可能性はない。

とすると、山風刑事は、活着ていることになる。

それなら、どうして姿をあらわさないのか。

(山さんの家族になんと伝えればいいのだろう)

花井は、鑑識の結果を待ちくたびれていた。

そこに、夜勤の交換から内線がはいった。

交換嬢はいつもの冷静なくちぶりで、花井にこう告げた。

「歌舞伎町のラブホテル〈H〉で、殺人があったようです。

第一発見者から通報がはいっていますので、つなぎます」

「人殺しです、人殺しです」

そうひたすら口走るだけのわめき声に、花井は苛だった。

花井はいくつか尋ねたが、相手はまったく答えられないうろたえぶりだった。

ますます苛だった花井は、

「了解」

と応えただけで、すげなく電話を切った。

(しかたないじゃないか)

と、花井は第一発見者に同情した。

(よほどの現場を目にしてしまったのだろう)

それでも、花井の腰はなかなかあがらなかった。

山風のことが気になってしかたがなかったし、いつも山風の指示でうごいている花井には、はじめどう対応してよいかわからなかったのだ。

他の刑事もパトカーもではらっている。

(しっかりしろや)

山風の声がきこえた気がした花井は、とりあえず歌舞伎町の派出所の警官と、巡回中のパトカーに連絡をし、現場にむかってもらった。

(しっかりしろや)

また山風の声がきこえた気がした花井は、警察署をとびでた。

なによりも落ちつくために、花井はゆっくりと現場にむかうつもりだったが、〈H〉についてのは、警官よりもパトカーよりも、ひと足はやかった。

そして警官たちや鑑識官を従えて、殺害現場検証のために、301号室にふみこんだ花井は、おもわず嘔吐しそうになった。

絨毯のうえにころがった、血まみれの男根が、真っ先に目にはいったのだ。

こまぎれの肉を見たときはだいじょうぶだったのだから、この嘔吐は爆風にやられた後遺症かもしれないと、花井は強がっておもった。

殺された男は素っ裸で、円形ベッドのうえにいた。

仰向けで口をおおきくあけているのは、叫んだまま絶命した様子をおもわせた。

首と胸と下腹部がえぐられ、血痕は風呂場までつづいている。

おそらく風呂場でやられ、内線電話のあるベッドまで逃げてきて、受話器もとれずに息絶えたのだろう。

小机のうえにある灰皿に、口紅のついたセブンスターのはいてが一本。

凶器は鋭利な果物ナイフで、風呂場の湯船のなかから発見された。

返り血をあびたらしい、白いレースのパンティが、やはり血だらけの女物のハンカチとともに、屑いれに無造作につっこんである。

そして洗面所の鏡には、血で書かれた文字。

「なんて書いてあるのかな」

花井がつぶやくと、鑑識官が遠慮がちに口をはさむ。

「死んでやる、ですかね」

「すこしちがう、しまいの文字は、団、だよ、団子の団」

「それなら、死んでやる、団ですか」

「死んだ、る、団、だな。」

【死んだる団】、【死んだる団】とはなんだろう」

「これは、第二の〈阿部定事件〉ですねえ」

「異常性欲者の犯行だろうが、ゆきずりの犯行らしくもある」

首をふりながら花井は、第一発見者から、犯人らしい女の人相や服装や様子をきくために、控室にいった。

(それにしても妙だ)

と、花井はおもっていた。

いくら慌てていたとはいえ、加害者はどうして、こんなに証拠になるものを、

いくつものこしていったのだろう。

もしそれが、慌てていたわけではないとしたなら、よけいに妙におもわれる。
(山さんならどう推理するだろうか)

と、ふと花井はおもった。

三日、午後十時半。

舟木英介は、藤上吾郎が辻中亀夫に宛てた手紙を、なんども読みかえしている。
たまたま目にした手紙を、舟木が読んでいいかときくと、亀夫はひとつ返事で
了解したのだった。

「どうです、私めは団長でしょうか。

それに、【死んだる団】なんて、ひとこともないでしょう」

亀夫は、余裕の笑顔だった。

舟木は、手紙を亀夫にかえし、

「この藤上という人、この高杉という人は、なにものですか」

舟木は、藤上吾郎と高杉京平という名前を、山内参三からきかされていたこと
は伏せた、

「仲間です」

亀夫は即答した。

「全共闘の仲間ですか、【死んだる団】の仲間ですか」

「単なる、仲間です」

ここに、またしても朝山完吉が口をはさんだ。

「たとえ【死んだる団】でないとしてもや、ぶっそうな仲間であることはたしか
やなあ、藤上は爆弾魔、高杉は殺人鬼って話やないか。

となると、亀さんは、なんや、同性愛者の強姦魔かい。

どうして、ぶっそうな仲間による、ぶっそうな事件が、つづけておこるんかい、
なっ」

しばらくテレビも新聞も見えていないはずの朝山が、おそらく酔ったいきおいで、
そんなことをいったので、舟木はあらためて朝山をうさんくさいとかんじた。

そうして、こんなふうにいつてみた。

「どうして、ぶっそうな仲間による、ぶっそうな事件がおきるのか。

このオソロシイ現象は、朝山先生のオソロシイ『暗殺論』のせいではないでし
ょうね」

朝山はあたまを抱えた、もしくはあたまを抱えるふりをした。

「おっと、矛先が転じられた。

『暗殺論』をオソロシイ本だとおもう者は、すなわち己のところがオソロシイ
のだとおもうべきや、〈おまえの敵はおまえだ〉。

ワイニンゲルやマインレンゲルに較べれば、わしの思想なんざ、穏健そのもの、
子どもだましみたいなものや、なっ」

ワイニンゲルもマインレンゲルもしらななかったが、舟木には、朝山のせりふが、謙遜ではなく、弁解にしかきこえなかった。

(学者は無責任なものだ)

と舟木はおもった。

現代なら、なにを考え、なにを吹聴し、なにを書き、なにを煽動したところで、〈二・二六事件〉のときの、北一輝とおなじく死刑になることはあるまい。

そんな舟木のおもいを讀んだのか、朝山はやや自嘲気味に語りだした。

「のう、おふたりさん、学者が行動しない人間だとおもいこんだら、大まちがいよ、学者ほど行動的な人間はおらんのや、いつもいつでもいつまでも、あたまになかで行動しておるんやからな。

イエス・キリストいわく、あたまのなかで助平なことをかんがえた人間は、じっさいに助平なことをしたのと同罪だってな。

しかしながら国家というものは、じつに現実的できあ、現実的に助平なことをしなければ、罪にはならん。

じつに拍子抜けだが、仮にだ、国家というものを無視すれば、助平なことをするなんてことは、たいした問題ではないんや、助平なことをかんがえることが、たいした問題ではなにのおなじで、なっ」

「なにをおっしゃりたいんだか、ぼくにはさっぱりわかりませんが、要するに、【死んだる団】、【殺ったる団】でもいいですが、連中がおこす事件なんて、たいした問題ではないと」

「仮定の話や。

あかん、貴君と議論しても、なんの解決にもならない。

尤も夏目漱石は、人生に解決することなんか、なにもないといっとった、なっ」

舟木のほうも、いまは朝山と議論などしているときではない、と覚った。

とにもかくにも、依頼人の山内参三を満足させる、おおきな手土産を、なにかもってかえらなければいけないのだ。

連絡もとれない状況のまま、時間だけがすぎさってゆく。

気の短い山内のことだから、こちらがもたもたしていると、麻暮正作に声をかけてしまうかもしれない。

あの麻暮名探偵が、本格始動したなら、舟木迷探偵なぞ用済みだ、お払い箱だ。

いささか焦りをかんじた舟木は、藤上の手紙に関して勢いこんで訊いた。

「この【D】ってのが、気になるんですけどねえ」

「それはDADDYのことです」

答を用意している者よりもはやく、亀夫は即答した。

「ダディ、外人の名前ですか」

「いえ、ダディはパパ、つまり父親」

「ああ、その頭文字の【D】というわけですか」

(もしそうなら【】なんかつけるだろうか)

そう舟木はおもったが、それには触れずに、山内の質問メモをまた確認して、

「高杉と藤上。他に、あなたの仲間、何人いるんですか」

「七人の侍、といたいところですが、私めがしているのは、あとふたり。
立花雪絵、この女性のことは、名前しか知らない。
清水清、五十三歳。この人は、清水印刷社長で、私めの大家さんでもあります。
妻子に先立たれてやもめぐらし」
亀夫は淡々と語り、舟木と朝山は顔を見あわせた。

四日、午前零時。

小金井豊は、名古屋から東京へむかう、夜行列車にのっている。
新幹線はもう動いていないので、空いている電車ならどれでもよかった。
寝台急行だったが、眠たくはなかったし、眠るつもりもなかった。
二時間ほど前、小金井は、飛驒の山裾をいっさんに駆けおり、ふもとの村の駐在所にとびこんだ。
高杉京平の自死の有様を話し、地図で地点を示した。
巡査には同行を促されたが、トイレにいくふりをして、すばやくタクシーにのったのだった。
のってきたブルーバードは、置きっぱなしにした。
運転できる状態ではなかったし、東京につく前にやりたいこともあった。
(タクシーの運ちゃんめ、あんなに臭がるなんて、失礼もはなはだしい)
と、小金井は自分から発する臭気ではなく、運転手の鼻のほうを問題にした。
まんいち鼻がたしかなら、京平のはらわたの臭気のせいだ、と自分を納得させた。
カメラとテープのはいったバッグを机がわりにして、ポケットから取り出した手帳に、速記術で記事の草案を書きはじめた。
そしてときおり小金井は、遠くを見る目つきをしたが、それは京平のすがたを思いおこしていたのだ。
まるで少年さながらの、はにかんだ微笑。
いかにも青年らしい、しなやかな物腰。
妙に老成した感じを与える、その口ぶり。
なによりも、美しいと形容するしかない、澄んだ瞳。
有名無名を問わず、おおくの人物と接してきた小金井だったが、あんな個性はじめてだった。
恐怖と、おなじ分量の魅力をかんじていた。
(そういえば、魅力の魅は、鬼へんだったな)
と、小金井は漠然とおもったりした。
若いころ小金井は、『太平記』だったか、切腹して敵にはらわたを投げつける、武将の話を読んだことがあって、若気の至りで妙に感動したりもしていたが、まさか自分が投げつけられるとはおもってもみなかった。
まだ自分のからだに、京平のはらわたが、こびりついている感触がして落ちつ

かなかったが、なぜか洗面所に行く気にはなれなかった。

四日、零時十分。

立花雪絵は、六本木交差点、喫茶店〈アマンド〉の前にいる。

そろそろ地下鉄は終電だが、四方八方が明るい。

雪絵の周りには、雪絵よりあきらかに若い女たちがたむろしているが、雪絵が発するオーラのまえでは影がうすい。

おりしも風花がちらつきはじめ、雪絵によく似合っていた。

若い黒服の男が雪絵に接近し、なにか耳打ちするが、雪絵の表情はかわらない。

黒服は苦笑し、通行人にカードをくばりはじめる。

近くのディスコ・パブの宣伝マンの黒服は、雪絵をナンパするつもりで声をかけたのではなく、客引きの手伝いをしてくれないかということだったのだ。

もし黒服が、仕事をさぼってまで雪絵をナンパしたなら、三十分後には、絨毯のうえに、黒服の男根がころがっていたにちがいない。

次に雪絵に声をかけたのは、酔っぱらったふたりのサラリーマンだった。

ちょっかいをかけると、雪絵の目がコケティッシュにうごき、口元に微妙な笑みがこぼれた。

よだれをたらしそうな顔のふたりは、ジャンケンをはじめた。

そのときすかさず、長身の黒人が雪絵の首筋に、たどたどしい日本語で、ちょっかいをかけてきた。

雪絵は流暢な英語で応じ、満面の笑みの黒人の、ふとい腕に華奢な手をかけると、快調にあるきだした。

黒人はその腕をのぼし、雪絵の臀部をつかんだ。

(このイエローキャブは十秒で完璧におれがのれる状態になった)

とでもいうふうに。

ふたりのサラリーマンは、ジャンケンをやめて呆然と見おくるしかなかった。

四日、零時二十分。

花井健太は、新宿署にもどり、夜勤の鑑識官からの報告をうけている。

肉片の血液型は、すべてAB型で、山風刑事のA型は、まったく見つからないとのこと。

爆死して粉々になったのは、藤上吾郎だけだったのだ。

これでひとまず安心だと、花井は山風の自宅に電話をいれた。

主人の仕事にあわせて、午前三時までには起きている奥さんだということをしてっていた。

なんどか晩ご飯をご馳走になったことのある、愛想のよい声がかえってきた。

花井は、山風が張り込みでもどれないことと、手が足りないので本人は電話をできないことを、いかにも嘘とばれる、しどろもどろの口調で伝えた。

それでも山風の妻は、不審がる反応はいっさいしないで、礼だけいうと、電話をきった。

おおきく溜息をついた花井は、〈公衆便所・爆破事件〉と、〈ラブホテル・猟奇事件〉の覚書を、大学ノートにまとめはじめた。

明日の早朝、山風のかわりに、課長に報告しなければならない。

明日から大規模な捜査本部が設けられるだろう。

けれども花井は（まだこのときは）、たて続けにおこったこのふたつの事件が、関係性のあるものだとはかんがえていなかった。

四日、午前零時三十分

朝山完吉は、舟木英介と辻中亀夫が見ているそばで、おおいびきをかいている。

亀夫が用意してくれた、かいまきをかきいだいている。

「亀さんや、いくらわしのいびきがすごいからって、首なんかしめんといてや、なっ」

横になる寸前の、朝山のせりふに、舟木も亀夫も苦笑を禁じえなかった。

「私らもそろそろ休みませんか。

舟木さんは明日はやいんでしょう」

亀夫がやわらかくいうのを、手で制して、

「いえいえ、山内参三が首をながくしてまっているだろうし、ぼくは引きあげますよ。

おかげでずいぶん取材できた気がします。

とりあえず〈かわらや〉にもどって、電話をいれないと」

「いまここを、でていくというんですか、それはいくらなんでも無茶です。

まだ雪はふっているし、道は暗くて遠い、野垂れ死にしちゃいますよ」

「なにせここは不便すぎる、ぐずぐずしてはられないわけがあるんです」

舟木は（一度しかあったことはないが）、強烈な印象をうけた、麻暮正作のことをおもいうかべていた。

「おおげさでもおどしでもなく、いまでるのは危険です。

それにもし、舟木さんがいまここをでて、運よく旅館にたどりついたとしても、昼すぎになってしまうはずですよ。

それなら明日の午前中に郵便配達がきますから、バイクのうしろにのせてもらって帰ったほうが、いろんな意味でよろしいとおもいます、いそがばまわれ、ということもありますし」

なるほどそのとおりだ、と舟木にはおもわれた。

川上真希のことをきいたせいなのか、いまの自分は冷静さを欠いている、ときめつけるほかはなかった。

探偵になるときに、自分なりにきめた《三原則》がある。

「あわてず」

「さわがず」

「さりげなく」だ。

麻暮正作には、もっと厳しい《十原則》があるという。

舟木英介は《十原則》どころか《三原則》でも、守れない、へっぽこ探偵なのだ、とどこからか声がきこえた気がした。

「あなたのいうとおりにしますが、大雪でもバイクはだいじょうぶなんですかね」

「そのときは犬糞でくるでしょう」

いいながら亀夫は押入から、もう一枚かいまきをとりだした。

「これを使ったら、あなたの分がなくなる」

舟木が、かいまきをうけとるのを拒むと、亀夫はやわらかく微笑んで、

「私めは眠りません、先の短い人間に睡眠は必要ありません」

「ではぼくもおきていよう、眠ったとたんにも首しめられたら、抵抗できそうもありません」

「先生じゃあるまいし、厭なこといわないでください。」

私めのターゲットは、舟木さんでも朝山さんでもありません」

「探偵はだれも信用しないものなのです」

と舟木はいったが、辻中亀夫なら信用できそうだとはおもっていた。

こういう人間を信用しないで、いったいどんな人間を信用できるというのだろうか。

すくなくとも、辻中亀夫は朝山完吉よりは、信用できる。

いま接しているものしずかでおもいやりのある男と、「全共闘の闘士」「【死んだる団】の団長」の呼称が一致しないのは、もしかすると辻中亀夫の正体は、『ジキル博士とハイド氏』なのかもしれない、ともかんがえた。

僕だって似たり寄ったりだとかんじるやいなや、舟木は亀夫に素直に礼をいい、かいまきにくるまった。

とたんにも疲れが全身を痺れさせ、朝山のいびき音が遠くなった。

もしかするとひさしぶりに真希の夢を見るかもしれない、とおもった直後には、もう眠りにはいっていた。

四日、午前零時四十分

立花雪絵は、六本木の同伴喫茶〈ドッキング〉の一室にいる。

ここまで一緒にあるきながら、黒人は名前をつけず、きかず、ただただ、

「ファック」

を連発していた。

ふたりはラブホテルに直行したが、歌舞伎町ほどおおくはない。

三軒あたって、どこも満室だったので、雪絵はこの同伴喫茶にさそったのだ。

受付で二千円払えば、空室ならどの個室にはいってもよく、九十分以内なら、退室は勝手にでていく、自由なシステムだった。

どの個室にも、数冊のマンガ本とラジカセと十本ばかりのテープと、ティーポットとティッシュと屑入れとコンドームが備えられている。

三畳ばかりの、薄汚れた個室にはいり、なかからキーをかけると、シートに座る気もみせず、黒人はすぐさま、雪絵のドレスのなかに手をいれてきた。

そこにむしりとるべきモノがないのをすると、黒人は狂喜の叫びをあげ、ズボンのベルトをはずし、すばやく下着ごとずりおろした。

雪絵が黒人の胸をかるくつくと、黒人はシートにひどく尻もちをついた。

それでも、コーラビンに似たペニスは萎えることがなく、

「カム・オン」

と、鼻息荒くあえぎつづけた。

雪絵はドレスを胸ちかくまでまくりあげると、いっさいのためらいもなく、黒人の腰に跨った。

黒人が喜悦の雄叫びを發したが、それは瞬時に激痛と恐怖の絶叫にかわった。

黒人のペニスは、雪絵のなかにはいったまま、その根本から完全に切断されていたのだ。

みるみるシートが血に染まり、自慢のモノが喪われているのをしった黒人は、両手で顔をおおって泣きわめいた。

その脳天へ、とどめのラジカセを、雪絵は烈しくうちおろした。

喜悦の叫びも泣きわめく声も、受付にいる店長は慣れていた。

けれども雷がおちた音にちかい、不審な大音響には、じっとしてられずに、それらしき個室を確認にいった。

そのとき雪絵がとびだしてきたので、この個室だろうと店長はのぞいた。

まず見えたのは、血まみれの下腹部を露出したまま失神している黒人で、店長は平然とした声で「やれやれ」とつぶやいた。

床板に血で書かれた、【死んだる団】の文字までは見なかった。

店長はおもむろに受付にもどると、慣れた調子で救急車の要請をし、麻布警察署に電話をいれた。

四日、午前一時。

花井健太は、新宿署のデスクで、まだ大学ノートにボールペンをはしらせている。

そろそろおわる、そろそろ仮眠がとれる、というときに、夜間受付から内線がはいった。

「花井刑事にご面会です、名前は秘密とのことです」

「こんなまよなかにかい、追いかえしてくれないか」

「人間のできてない花井刑事はそういうだろうから、人間のできてる山風刑事の

用件だ、そう伝えてくれとっています」

「それでわかった、通してくれ」

小林勘助だとわかったのだ。

山風順一刑事が、暴力団相手の事件の際に、手足としてスパイふうの仕事を依頼してきた、暴走族あがりのチンピラだった。

勘助は皮ジャン姿で、両手をふって、遠慮なくはいつてきた。

花井に挨拶もしないで、花井の鼻の先にちいさな紙包みをつきだした。

「ほらよっと」

勘助は、山風には従順だが、花井には態度がでかい。

「なんだこれは」

花井のほうも、山風には素直だが、勘助には言葉も荒くなる。

「そんなことするもんか、山さんからあずかったんだ、花ちゃんにわたしてくれってさ。」

さっきもきたんだが、あいにくあんたは歌舞伎町まで、ではらっていたからね」
(そうかそうか、山さんはやっぱり生きているんだ)

何日かぶりに、花井は笑った。

「笑ってるひまがあるんなら、はやくこれ確認してみなよ」

勘助に促されて、花井が紙包みをひらいてみると、山風がよく活用していたテープにまちがいなかった。

ふつうのラジカセではサイズがあわないので、花井は特別監査室へむかった。

勘助がついてくるので、おしとどめようとしたが、

「山さんならきつとこういうよ、勘助にだって、しる権利も義務もある」

と、へらず口をたたかれ、同行させた。

ふたりしてテープのなかみをきいたが、はじめは雑音ばかりがつづき、そのあとで山風だとはっきりわかる声がきこえてきた。

『わかった、もういいから、遺言をきこうか』

『おいらは身寄りがないから、遺言はいらねえ。

けんど、あと二分あるから、気まぐれで、ひとつだけ土産話をのこして逝くかな』

『すきにしろ』

『あんたは犬みてえなツラしてるんだろな、秋田犬ならええんじゃが』

『その捨てぜりふが、冥土の土産かい』

『京都で、偉大な殺人が実行される。

首相が暗殺される以上の、その大仕事をやるのは、おいらが唯一尊敬する、辻中亀夫』

『あの全共闘の辻中か』

『おいらは失敗したけんど、辻中さんは失敗はしねえ』

『辻中は京都のどこにいるんだ』

『それをしらべるのが警察だろが、まあいい、嵯峨野の清水印刷だ。

上等なデカのあんたが、いまさらかけつけても、まんずまにあいっこねえ』
『おい、ちょっと待て、もっとくわしくおしえてくれ』
『【死んだる団】バンザイ』

しばしいろんな音がきこえ、烈しい爆発音と同時にテープはおわった。
山風刑事は、最後まで悪戦苦闘をしたにちがいない。
便所の扉にぶつかる音もしたし、拳銃で鍵を撃つ音もしていた。
手錠の音らしきものもきこえたのは、もしかすると逮捕一步手前までいったのかもしれない。

だが便所は大爆発し、藤上吾郎は肉片と化し、山風刑事は負傷しつつも京都へむかった。

花井の推理はほぼ当たっていたが、花井の頭を占領していたのは、なによりも、藤上吾郎の最期の叫びの言葉だった。

「【死んだる団】か、いったいどうなってるんだ、あいつもこいつも【死んだる団】」

花井は背筋に冷たいものが通りすぎた気がして、ふりかえったが、そこにはふてくされた顔の勘助が突っ立っているだけだった。

花井は大学ノート（〈ラブホテル・猟奇事件〉の覚書）をやぶって、青焼きで写しをとると、それを自分の財布といっしょに勘助にわたした。

「京都嵯峨野の清水印刷だ、一刻もはやく山さんを見つけてくれ」

勘助はだまって肯き、だまってその場からきえた。

四日、午前一時半。

松本大海は、旅館〈かわらや〉の玄関口にいて、おかみと話をしている。

「それでは舟木英介さんは、嵯峨野まででかけているということですね」

「へえ、そういうことです」

おかみのいいかたは素っ気なかったが、大海を不審人物とみなしていたわけではない。

大海の精悍で誠実そうな顔に、好感をもたない者は変人のみであろうから。

「舟木さんは戻られますか」

「さあ、今晚はなあ。もうおそいし、この天候では無理どすなあ」

「それでも、いつかは戻るでしょう」

「それは、まあ、まだ荷物もありますし、宿賃もまだやしなあ」

「それでは自分は、この宿でまたせてもらいます」

「お部屋、空いてはらしまへん」

「自分は、物置でも犬小屋でもけっこうですから」

「そんなわけにはいきまへん」

おかみは、大海のかっこうを点検しながらいった。

ダッフル・コートの中かは、手編みのセーター、ズボンはコーデュロイで、全

体として高価なものではないものの、いまどきの若者にしては清潔だ、というのが咄嗟のおかみの判断だった。

「自分は、鍛えているのでだいじょうぶなんです」

「舟木さんとは、どんなご関係で」

「自分は、舟木さんの甥です」

大海の言葉が、嘘か真かは、どうでもよかった。

ようやく、おかみの愁眉がひらいた。

「ご親戚なら、問題ありまへん」

おかみは番頭をよぶと、舟木の部屋に大海を案内するよういつけた。

部屋にはいるなり、大海は、すぐさま衣服をすべてぬぎすてて、全裸になった。

まるでウェルター級の、プロボクサーの肉体だった。

大海は、腕立て伏せを百回続けざまにやってから、空手の型を三回くりかえし、また腕立て伏せを百回続けざまにやって、三分間だけ坐禅をくんだ。

それからタオルを腰に巻くと、堂々と岩風呂へむかった。

四日、午前一時四十五分

花井勇太は、六本木の同伴喫茶〈ドッキング〉の、事件現場にいる。

被害者の黒人は、救急車で病院に運ばれているが、すでに死亡しているとのこと。

麻布署の花井勇太刑事は、新宿署の花井健太刑事の、双子の兄で、署をとびでる寸前に、弟からの電話をうけている。

そして、新宿歌舞伎町のラブホテル〈H〉での、猟奇事件のあらましをきいている。

だから花井勇太は、こんどの六本木の事件と新宿の事件とを頭のなかで照合して、同一犯人だとにらんでいる。

花井刑事は、自分くらい落ち着き払っている店長から、犯人の人相をこまかくきいた。

そして、絵心のある花井刑事は、その場で警察手帳にゆくりなく女の顔を描いた。

「そっくりです」

と、(殺害現場を見ても驚かなかった)店長が、驚嘆の声をあげた。

肯いた花井刑事は、現場の刑事と警官をすべて集合させ、自分が描いた人相書きを見せた。

「いいか、女はまだこのあたりに、潜伏している可能性がたかい。

赤坂署や青山署にも通達しておくが、我々は夜を徹して、この女の発見に全力をそそごう。

女は今晚だけで二件の殺人を犯している、三度目の犯行は、我々の手で事前に防がねばならない」

四日、午前二時半。

山内参三は、あいかわらず麻布十番の書斎にいる。

山内は眠れず、苛立ちはつのっていた。

舟木英介はまったく連絡をよこさないし、麻暮正作は【D】とか荒野とか、わけのわからぬことを口走っているくらいだから、こっちの思惑どおりにはうごくまい。

「待ってってもラチがあかん」

山内はつぶやき、万年筆（十年間使っているモンブラン）を手にした。

「おれには生涯おまえという強え味方があったのだ」

このごろ山内は、独り言をいう癖がついていることを自覚している。

独り言だけをテープにおさめて、一本の原稿をものにしたこともあるほどだ。

「おれはさびしいんだ」

こんどは歌謡曲の歌詞を口にした。

すると、三歳になるひとり娘の幼顔がうかんだ。

昨年妻は男をつくって逃げ、山内は（娘を自分が引き取ることを条件に）離婚届にサインをした。

その娘も、埼玉蕨の老いた両親に預けっぱなしで、しばらく会ってはいない。

山内は頭を強くふり、モンブランに力をこめると、原稿用紙の右端からこう書きはじめた。

《十年以内に、日本は滅ぶ。

日本を滅ぼすのは、外敵でも天変地異でも公害でもない。

日本は、この集団によって、滅ぼされるのである。

諸君はきいたことがあるか。

この不穏で禍々しい名称を。》

それからおもむろに、

《【死んだる団】》

と大書した。

ここまで書いて、いちど宙を見た山内は、寝不足のわりに頭は回転する、とわれながらおもった。

タバコをすうのもわすれ、山内は続けた。

《諸君は【死んだる団】から、なにを連想するであろうか。

日本の悪夢の時代を怪しく彩った、狂気の団体か。

むろん【死んだる団】は、架空の国の架空の集団ではない。

明日から、新聞やテレビでさかんにとりあげられても、諸君はその実体を知ることはない。

諸君は、あの悪夢の時代を、連想するだけだ。

そして【死んだる団】に就いて、小生が書くことは、なにを書こうが、悪夢を見ることに等しいといわねばならない。》

チャイムが鳴り、山内は耳の錯覚だとかんじた。
いくら凶々しい編集者でも、この時間にはやってこない。
またチャイムが鳴ったので、山内はモンブランを静かに置いた。
こんどは妻の顔がおもいうかんだが、編集者よりも可能性はひくい。
またチャイムが鳴ったので、山内は返事をする前に、一円玉よりちいさい覗き窓からうかがった。

女、しかも見ず知らずの女だ。
借金取りにきた銀座のママではないが、ママよりも若く色っぽい。
新卒の売春の営業かともおもったが、そういう気配でもない。
とにかく事情だけきいて、たいした金でなければそれをもたせて帰ってもらおう、とかんがえた山内は、ドアをあけた。

「たすけて、ください」
と囁き声でいいながら、はいつてきた女の姿を見て、百戦錬磨の山内も息をのんだ。

バッグで隠そうとしてはいるが、そう簡単にはいかない赤黒い血の量が、ドレス前面を占領していたからだ。

山内があわてたのは、その血が女の血だとおもいこんだためであって、山内は救急車をよぶために電話に近づいた。

「やめて、ください」
切羽詰まった、というよりも変に艶めかしい声で、山内はとどまり、とまどった。

「しかし、これは、事件だよね」
山内はいつてしまってから、ずいぶん商売くさい言い方をするもんだ、と自嘲した。

「すみません、きゅうに、ひどい生理がきてしまったものですから、こころまで血だらけになった気分です」

女はうつむき、強烈な血のにおいが、山内の鼻をおそった。
それが女の血のにおいだとは、そう素直には山内はおもわれなかったけれども。
「それは災難ですな、タクシー代貸しますから、はやくお帰りになったほうがいい」

視線を逸らせて山内はいつた。
「この有様ですから、タクシーに乗車拒否されてしまって、それに痛みもはげしくて、からだ以上にこころがもう歩けません」
「それならやはり救急車だ、それが常套手段だ」
ふりむいた山内の背に、女がしがみついた。
女は、小刻みにふるえている。
寒さのせい、出血のせい、それともやはりなにかあったのか。

と、まだ山内は事件の臭いを嗅いでいた。

だが山内は、【死んだる団】以外の事件に、いまは興味がなかった。

「そんな恥ずかしいこと、とてもできません」

「しかし、このままでは、よくない」

「このままで、いいんです」

「しかし、背中が、おもい」

女は手をはなし、ひといきついてから、

「外から灯りが見えたのはここだけだったものですから、もうしわけないとおもいながらも、こころから甘えさせていたごとうとチャイムをおしたのです」

どこから見ても美人というほかはない、女のか細い声は、山内のからだのどこかに浸透してきた。

「おれに、どう甘えようというんだね」

山内がぶっきらぼうにいったのは、好意をもったことをみやぶられたなら、過度に甘えられてしまうとおそれたからだ。

「お厭でなければ、すこしだけなかにいれていただけませんか、ずっと寒いなか

にいたものですから、こころまで凍りそうなのです」

「ま、お厭でもないがね、こころが凍るのはよくないしなあ」

山内は女をなかにいれて、電気ストーブを弱から強にかえた。

こんな状況になるとは予想もしていなかった。

それでも山内は、こんな状況を忌んでいたわけではない。

ただ、女のことばに、「こころ」がしきりにでてくるのだけは、気になったけれども。

「ほんとうにすみません、こころがおちつきましたら、すぐにでていきますから」

女が電気ストーブの前にすわりこむと、山内はその周りを片づけはじめたが、

やったことがないことをしてもうまくはいかなかった。

「まあ、散らかっていたほうが、おちつくという人もいるからね。

あとさ、あたたかい飲み物がほしかったら、そのちっちゃなキッチンで勝手にやってくれ、あれま、駄洒落になっちまったな」

ひとりで喋りひとりで囓うのかとおもったが、女はさもおかしそうに笑った。

女に対する印象をますますよくした山内は、収納ボックスをさぐって、自分がいちばん気にいっている、パーマーのセーターをとりだした。

「ゴルフのシーズンではないが、大自然にひたつたつもりで、のんびりやってくれ」

わたすとすぐにドレスをぬごうとするので、山内は背中をむけてデスクにむかった。

「すまんが、おれは仕事でね、仕事でおれはインポだし、君は生理だ、なんの心配もいらんから、すきなだけ休んで、すきなときに帰ってくれ。

ちなみに、仕事中は話しかけないでくれ、失礼な言い方だが、おれのスタイルなんでね」

「あの」

と、着替えた女が遠慮がちにいった。

「工作中は、話しかけないでくれ」

「あの、だから、いま声をおかけしたのです」

たしかにまだ、仕事にとりかかっているはいない。

「あいにく、もう仕事モードなんだ、ご勘弁」

山内が照れ屋であることを、雪絵はもう見ぬいている。

「あの、まだ自己紹介もしていませんので、こころが疼きます」

「おれは山内参三、しがない」

「しがない、だなんて、慇懃無礼ね、有名なライターさんなのに」

「慇懃無礼の使い方がちがう。

そんなことより、まさかおれの書斎とわかっていて、やってきたわけじゃないだろうな」

女に弱い山内でも、なにか騙されている気になってきた。

「表札拝見しただけです。

わたしは立花雪絵」

「こころはわからんが、名前はいい。

小説にでてきそうな名前だ」

わざと「こころ」を使って、皮肉ったつもりだったが、雪絵には通じなかった。

「小説にはでてきませんが、新聞にはでます」

「生理事件くらいで、新聞にでるもんか」

すでに山内は、単純な生理事件とはおもっていなかったが、そういうことにしておきたかった。

「賭けしましょうか。

もし新聞にでたら、こころから助けてくれますか」

「おれにこころなんかない、あるのは仕事と、持病だ。 お腹まだ痛いんなら、鎮痛薬とか睡眠薬とかあるぜ」

「薬は一切のみません、のむのはピルだけです」

「なんだい、挑発かい。

さっきもいったが、おれは工作中はインポだ、それに生理中の女とはやらん」

「もし、仕事がおわったら、もし、生理がおわったら」

「この仕事は今年いっぱいかかる、はじめての困難な仕事なんだ」

自分にいきかせながら行って、山内は無意識にふりかえってしまった。

山内のセーターは、雪絵に似合っていた。

雪絵の蒼白かった頬には、うっすらと血がかよってきていた。

そんなことよりも、山内の目にやきついたのは、なにもつけていない、雪絵の股間だった。

しかも、そこをわざとひろげて見せているとしかおもわれない、雪絵の姿勢だった。

陰部のそとに多量に付着している黒い血は、陰部のなかには少量すら見られなかった。

視線をはずした山内は、わざと語気を強めて、
「どうやら、生理ではなさそうだ。
なにか魂胆があるのかね」
「わたしはただ、恩返しがしたいのです」
「からだで、恩返しかい」
「山内さんさえ、よろしければ」
「なんどいわせる気だ、いまおれはインポだ。
それにおれは初めてあった女性と、簡単に寝る男ではない」
そして、ひさしぶりに屹立したモノをなだめるために、ハイライトに火をつけた。

雪絵の吐息が、耳のすぐうしろでしたかとおもうと、つと山内の肩に、雪絵の手がおかれた。

「男らしい方が、インポになるほどのお仕事って、なにかしら」
山内の肩越しに、雪絵が机上をのぞきこむ気配がした。
【死んだる団】と大書された、原稿用紙を。

四日、午前三時半。

花井健太は、新宿署ではなく、いまは麻布署にいる。

アパートに帰って、やっと熟睡できるとおもっていたところへ、兄の花井勇太刑事から電話がはいったのだ。

兄のところへいくと、人相書きを見せられた。

「へえ、被疑者は、こんな美人なのか」

兄の絵心をしっている弟は、兄の絵を信じた。

「美人もこういうときは損だな。こんな美人が発見されないわけではない。時間の問題さ」

花井勇太刑事は、自信満々の口調でいった。

「歌舞伎町と六本木、やはり同じホシだね」

花井健太刑事は、ラブホテル〈H〉の受付からきいた人相の覚書と、兄の人相書きをくらべた。

「殺しの手口からいって、九割というところか」

「僕も兄貴くらい絵がうまければ、十割だったんだがなあ。

いずれにしろ【死んだる団】ということだね」

「稀代の悪女だ、西太后をおもわせる」

「そうそう、電話で話したのは、このテープだよ」

花井健太刑事は、兄に、山風刑事がのこしたテープをわたした。

四日、午後四時半。

舟木英介は、くもったガラスを手でふいて、小窓から、白い斑点をつけた暗黒の空を見あげている。

それから、嵯峨野の雪に目をうつす。

金輪際やむことがないのではおもわせるほど、淡々とふりつづいている。

すると、その白一色のいちばん奥、そのいちばん中心に、ひとりの人間の姿が仄かに見えた。

郵便配達がくるにはまだ早いし、朝山完吉も辻中亀夫も眠っている。

いったいだれだろう、清水印刷の社長かもしれないとおもったとき、その人間の姿が、女だとわかった。

(なんだ、まるで、雪女じゃないか)

たしかに女は、真っ白い衣につつまれている。

白い衣で雪のなかをくるから、なかなか判断できなかったが、しだいにちかづくにつれ、顔がはっきり見えた。

(真希、じゃないか)

まちがいなく川上真希が、この小窓のほうにやってくるのだ。

(ぼくに会いにきたのか、いや、そんなはずはない。ぼくがここにいることを、してはいないはずだから。

となると、真希は、辻中亀夫に会いにきたのだ、亀夫は、ぼくたちに嘘をついていたのだ。

やはり、真希の相手は、亀夫なのだ、ほら真希が微笑んでいる。

だが、あそこから見えるぼくは、黒い人影にすぎない。

きっとぼくを、亀夫だとおもいこんでいるのだ)

真希が、小窓のすぐ近くまできた。

顔が真っ白で、唇だけが紅い。

真希は、小窓に顔をちかづけ、唇をガラスに押しつけてきた。

言葉にできない感情、舟木にとって初めての感情が、こみあげた。

(ぼくは辻中亀夫じゃないぞ、舟木英介だ)

すると、その唇がゆくりなく肥大化し、ガラス全面、唇で満たされた。

(このバケモノめ)

冷気をかんじ、舟木は拳をかためた。

唇のオバケが、なにか囁いている。

「【死んだる団】【死んだる団】」

とささやいているのだ。

舟木は、唇めがけて拳を突きだした。

ガラスが粉みじんになり、雪まじりの寒風が、部屋に吹きこんできた。

こらえながら目をこらすと、黒い天にむかって、白い真希がゆっくりと上昇していく。

「待ってくれ」

舟木は叫んだつもりだが、声にならない。

烈しい後悔の念がおそってきた。

(真希はいつてしまう、ぼくの手のとどかないところへ)

「許してくれ」

これも声にならなかった。

自分の名を呼ぶ声がした。

ふりかえると、辻中亀夫の凄まじい形相。

頭上に、日本刀を構えている。

抵抗しようにも、舟木はからだがうごかない。

目を血走らせた亀夫が、れっぱくの気合いとともに、日本刀をふりおろした。

「やられた」

と叫んで、舟木はとびおきた。

やられてもいないし、亀夫もいない。

ガラスの小窓は割れていないし、雪もやんでいた。

月が顔をだしているのか、それともそろそろ日の出なのか、窓のそとも部屋のなかも、仄かに明るい。

「夢、か」

舟木は、額の脂汗を拳でぬぐった。

朝山完吉は眠っているのだろうが、いびきはきこえない。

かいまきから、頭部と脚部だけがとびだしている。

辻中亀夫が消えることは、想定内だった。

これ以上、舟木が聞きだせることはなかったし、舟木としても、山内参三に報告することが先決だった。

郵便配達がくるまで、まだだいぶありそうだったが、舟木は寝なおす気にはなれなかった。

夢にしては、不気味なくらいなまなましかった。

その残影をふりはらおうと、舟木はストレッチをするつもりで、からだをうごかしはじめた。

そのとき、血のにおいをおいを感じた。

夢ではなく、本当に日本刀でやられたのか。

おもわず全身を点検して、安堵した。

またストレッチをしながら、朝山の寝床をながめていた。

なにか、妙だ、とおもった。

なにが、妙なのかは、わからない。

血のにおいは消えない。

念のために、朝山に声をかけようとおもって、気づいた。

じつに、妙なことを。

同時に、背中に、戦慄がはしった。

かいまきからはみだした、朝山の頭部のでっぺんから、朝山の脚部のさきっぽまで、どう見ても三メートル近くあるのだ。

油断なく腰をかがめ、かいまきを慎重にめくった舟木は、

「嗚呼、嗚呼」

と叫ぶほかはなかった。

朝山完吉の首が、切断されていたのだ。

この現実、悪夢のつづき、ではなかった。

四日、五時半。

麻暮正作は、〈愛信会〉のメッカにいる。

秩父山中、かつて〈困民党〉が集結した地点にちかい。

〈愛信会〉総本部は、異様な建築物で、それを見ただれもが、巨大な墓石だとおもう。

すべて純金で造られていて、かくべつ、真夏の陽光にてらされると、真冬の月光よりも冷たく妖しく、ひかりかがやく。

麻暮は、夜陰にまぎれ、その黄金の墓石の一角に、すでに忍び込んでいる。

そしてやはりすでに、ひとりの見張り役の信者を捕らえて半殺しにしたあげく、空室にほうりこんで訊問を開始するところだ。

正気にもどったばかりの信者は、うすぐらい部屋のなかでも不気味にひかる麻暮の鋭い両眼をおそれて、ひたすらふるえるのみだ。

もしその顔が二倍に醜くふくれあがっていなければ、かんじのいいハンサムな青年のはずだ。

麻暮は、信者がおちつくのを待った。

それでも、待ちすぎるということをしなかった。

麻暮はきわめて声をおとし、信者へ問いかけた。

それは、警察の冷静な取調官よりも冷徹な、余計な世間話なぞない、単純明快なものだった。

「君の名は」

「ここでは、世俗の姓名は用いません」

「君の歳は」

「いまの答とおなじです」

「君の教祖は」

「もちろん日下典禅尊師ですが、私はいちどもお会いしたことはありません」

「なぜ会えないのか」

「尊師が総本部においでになるのは、年に数回とかぎられていますから、おいでになっても、私にご尊顔を拝すことはできません」

「君の立場が低いせいかな」

「私はこれでも本部守衛班班長です。」

「尊師はだれにもお会いになりません」

「それでは、ありがたい典禅の教えは、どうやってきくのだ」

「教えというものはないので。」

私どもは日々修業をかさねるだけです」

「どういう修業なのだ」

「ひたすら祈ります」

「なにを祈るんだ」

「世界の平和と人類の幸福を祈るのです」

「修業に金が要るのだろうか」

「不要です。」

私どものおおくは、一文無しでここにやっています」

「カネをみつめないで、ご立派なキンの建物が造れるとおもうかん」

「尊師は、泥を金にかえることのできる、超能力者なのです」

「錬金術師、というわけか。」

そんな大時代的なことを信じているのかん」

「さっき私はいちどもお会いしたことがないといいましたが、たったいちどだけ遠くから尊師のお姿を拝見したことがあります。」

お写真を見ただけでも感動したのですが、お姿を見たときには、その神々しさに正直ふるえがとまりませんでした。

あのお人なら、どんなことでも信じることができます。

嘘だと思えば、あなたも一度ご覧になるといいです」

このときはじめて、麻暮はケケケという、例の癖のある嗤いをもらした。

しかしそれは瞬時のことだったので、こころここにあらず、といった風情の信者には気にならなかった。

「阿呆か、一度どころではないん」

「羨ましい話です。」

それではどうして信者にならなかったのですか」

「莫迦め、質問者はボクだ、君ではない」

「そうでした、失礼しました」

信者の声調は、素直で誠実で謙虚なものだった。

素直・誠実・謙虚は、麻暮が唾棄する、みつつの言葉であり、態度だった。

「君は、荒野大三郎という名を、きいたことがあるかねん」

「まったくありません。」

もしきいたことがあったとしても、忘れさっているでしょう。

祈ることは、忘れることでもありますから」

「それでは、日下典禪の過去をしっているか、〈愛信会〉をつくる以前という意味だ」

「しりませんし、しる意味もありません。」

過去をすてなければ、この道は成就しません」

「道の成就とは、なんだい」

「覚醒、することです」

「阿呆か、覚醒剤、やっているな」

「覚醒とは、真理に到達したことです」

「ボクほどの探偵になると、いつでも真理に到達しているが、まあいい。
典禪の親しい人物はいるかな」
「尊師を呼び捨てする人に、真面目に答えられるかどうか、よく考えてみます」
「それほど、考える時間はない。
典禪様の親友はいるのかなん」
「はい、朝山先生です。
親友というよりも、おたがい畏友でしょうか」
『暗殺論』の朝山完吉か、懐かしい」
「秩父でもなにか会見しています。
先日は京都で会見なさったはずですよ」
「では、典禪様も朝山先生も、京都にいるのかん」
「会見はおわっても、おふたりとも京都ずきですから」
「典禪様と朝山先生は、古い友人なのかん」
「さあ、でもご息子同士が、竹馬の友ということだそうですから」
この答に、麻暮のこけた頬がけいれんした。
けれども、両目蓋も腫れあがっている信者には、気づくはずもなかった。
「そのご息子とやらの名は」
「プライベート侵害になりませんか」
「阿呆か、君のプライベートはどうなる。
答えなければ、いま見えにくい君の目は、完全に見えなくなるんだん」
「こころの目があります」
「莫迦め、こころの目だって、見えなくなってしまうんだん。
わからないのか、暗、黒、の、宇、宙、に、君は、ほうりだされるんだ」
「いいます、いいます、尊師のご息子は、松本大海さん、先生のご息子は、朝山善吉さん」
「参考になった、これで君は解放だ、ケケケ」
麻暮正作は、護身用（というよりも、本当は強力な武器である）ステッキで、
信者のみぞおちをかるく突いた。
信者は気を失い、麻暮はすばやく姿をけした。
五分後、冬枯れた雑草のなかから、黄金の墓石を見あげた麻暮正作は、己の宿敵が、以前にもはるかに増して巨大になっていることを、認めざるをえなかった。
麻暮は、ようやく仄明るくなってきた秩父の山道を、
猪よりもはやく駆けおりながら、いまは亡きバリの妻子の顔をひとりひとり思い
うかべていた。

四日、午前六時半。

松本大海は、旅館〈かわらや〉の岩風呂をでてから、
玄関近くのマッサージ機で、日々の筋トレで酷使したからだをほぐしている。

すると、学生服を着た坊主頭の青年が、玄関からなんの前ぶれもなくはいつてきた。

「おいおい、松本大海やないか、どうしてこんなところでのんびりしているんだい」

大海もすぐに気づいて、

「なんだなんだ、朝山善吉じゃないか、君こそ、こんなところへなんの用だい」

このガリ勉タイプの大学生は、朝山完吉の息子の善吉だったのだ。

つまりふたりは、〈愛信会〉の信者のいうところの、「竹馬の友」

だった。

「ぼくは、おやじに会いにきたんだ」

善吉は笑顔になって、大海のちかくにきた。

「そうか、善吉のおやじさんの朝山先生も、〈かわらや〉にきているんだね」

「きているのではなく、ほんまはこの一室を書斎がわりにしている」

「おかみさんの話では、残念ながらいま朝山先生は、嵯峨野にでかけている」

「そんなら、ぼくはここで待たせてもらうかな」

「じつは自分も待っているんだ、朝山先生といっしょに行動している、舟木英介という探偵をね」

大海の言葉に、善吉は声をおとして、

「ということは、大海のターゲットは、その舟木英介」「そういうことだ」

「その探偵とは、どういう関係なんや」

「おたがい、干渉なしの約束だろ。」

自分、いや自分たちは殺す、そして死ぬ、それだけでいい」

「そのとおりで」

と断言してから、善吉はしずかにことばを継いだ。

「それでも、ぼくのおやじの朝山完吉と、大海のターゲットの舟木英介が、いっしょに行動しているということは、仲間か友人か。」

となると、おやじは、大海の蛮勇のまきぞえをくう可能性があるということではないのか。

もしそうなら、ぼくだって黙ってはいない」

「おもしろい、自分の空手と善吉の合気道と、冥土の土産の一本勝負といこうか」

大海は、マッサージ機から身をおこし、身がまえた。

「あいかわらず大海は気が早くて軽薄。」

もしかしてその舟木英介探偵も、気の早さと軽薄が決めたターゲットなんじゃないのかい。

いずれにしろ、ぼくと共に、おやじを待つしかない」

「おやじどのと最後の別れか。」

善吉もずいぶんと感傷的なんだな」

「なんとでもいいなはれ、ぼくはおやじに、たったひとつだけ、ききたいことがあるだけや。」

それをきくまでは、大海と決闘なんかできない」

「一本勝負なんて、冗談にきまっているだろ。

自分はたしかに、気が早くて軽薄、でも善吉は、思いこみがはげしくて、重すぎる」

「当たっているから、憎らしい」

善吉は気持よさげに笑いながら、大海の隣のマッサージ機に坐った。

いまの時間、ここが最も静かで最も人がいない場所だった。

すこし間をおいて、善吉が口をひらいた。

「ねえ大海、ちょいときいてもいいかい」

「おたがい、干渉なしの約束だろ」

大海はさっきとおなじせりふをいったが、頑固でないのが短所であり長所でもあった。

「ききたいのは、ほかでもない、大海のお父上と、ぼくのおやじとの関係だ」

「自分のおやじの松本玄信と、善吉のお父上の朝山完吉先生との関係ねえ」

大海は茶化したわけではなく、わざわざ問題とするほどの関係でもなかろうと、高をくくったのだ。

善吉は、坊主頭を両手の指でささえるしぐさで、言葉をしぼりだす。

「めったにお父上とは会っていないという大海は、たぶんかんじていないんやろが、ぼくには気になることがある。

たとえば、川上宙衛門さん」

「ああ、【D】の所長の川上さん」

「なんだかんだあったが、ぼくたちは結局、あの川上宙衛門さんい説得され、あの人を尊敬し、信じ、【死んだる団】の一員となった。

そうやね」

「そう、そのとおりだ」

「【死んだる団】の団長は、清水清。

ぼくらはよくしらない人だが、あの畏敬すべき辻中亀夫も、【死んだる団】の一員だとわかって、ぼくらは納得した部分もあった」

「まったく、そのとおりだよ」

「それはともかく、川上宙右衛門さんの言葉のなかに、ぼくのおやじの朝山完吉の言葉が、ずいぶんはいつていることに、大海はまだ気づいていないよね」

「なにせ『暗殺論』は、自分には難解で、読めていないんだよ」

「ぼくも同じさ。

でもこの期におよんで、ぼくはこの数日、『暗殺論』を再読して、はっきりとわかったんや」

「つまり川上さんの思想は、朝山先生の受け売りだというんだね」

「たしかに川上さん流に、換骨奪胎した言葉にしている。

けれども本質的には剽窃といっても過言ではない」

「もしそれが本当なら、自分たちは、川上さんの言葉に説得されたのではなく、朝山先生の言葉に説得されたということになるのか」

大海は腕をくんで、善吉の、なんとも微妙な表情の横顔を見つめた。

「ぼくは、おやじを見くびっていたのかもしれない」

「しかし善吉、いまの話は、朝山先生と川上さんの関係であって、自分のおやじの玄信とのことではないね」

「それをこれから話す。

大海が【D】につれききた、あの女性」

「川上真希さんか」

「その真希さんが、【D】の所長の川上さんの、養女だってことは知っているよね」

「なにになに、しらんしらんよ、初耳だ。

姓がおなじくらいでそこまでは想像できない。

どうして自分に隠していたんだろう」

「それはいえないだろう。

川上さんと真希さんは、書類上は親子、そのじつ愛人関係なんやから」

「まさか、冗談はかんべんしてくれ。

自分のターゲットをふやすつもりかい」

「小説よりも奇なりってことは、周りでいくらでもあるんやから、冗談だっていくらでもある、真実は大海自身がたしかめるしかない。

ぼくにはそうした男女の機微よりも気になったことがある、それは、真希さんが【D】から退出するさいに、独り言としてもらったコトバなんだ」

「善吉は、たまたま耳にしたんだな」

「そうそう、ほんまに真希さんはこうつぶやいたんだ、『大明神の傀儡のくせに』。

だれのことかって、むろん大海のことを、そう蔑んだんやない、川上宙衛門さんのことを、そう喩えたんだよ。

それでその『大明神』だが、とうぜんだれのことか、わかっているよね」

「『大明神』は、自分のおやじ松本玄信の、渾名というか、いまや肩書きかな。

でも、一般的にいうところの大明神ではないのかい」

「それがさ、ニュアンスがあるやろ、一般的か個人を指すか、そのニュアンスが。

あの言い方は個人を指していた」

「まいったな、それで、カイライって、なんだ」

「あやつり人形だ」

「するとなにか、川上宙衛門所長の【D】には黒幕がいて、それが自分の父の松本玄信だということか」

「となると、となるとだね。

朝山完吉と松本玄信のふたりの傀儡が、川上宙衛門」

「まいったな、その話が真実なら、自分たちは自分たちの父親のカイライに、説得、いやカイライされていたということになるのかもしれない」

「ぼくの推察では、いやぼくでなくとも、ぼくの体験を共有した者は、おなじ結論に達するだろう。

【D】の創設者兼オーナーは、松本玄信。

【D】の思想的支柱は、朝山完吉。

長くなったが、だからぼくは、ふたりの関係を云々したんや」

「じっさい、まいった」

ここで大海は、驚愕と困惑のまじった顔を、天井にむけ、両手で頭をおおった。その手にそっと手をおいて、善吉はまた話します。

「これで終わり、ではない。

じつは先ほど、おやじ宛てに、遠距離電話がはいった。

私立探偵の麻暮正作だと名のつたが、探偵というだけで、うさんくさいとかんじたぼくは、すぐに電話をきろうとしたんやが、麻暮氏は、おやじの完吉と旧知の間柄だといひ、その証拠をいくつか喋った。

それは信用するしかない内容だったので、ぼくは用件をきいたのだ。

すると麻暮氏は、【D】のありかをたずねた。

それだけかときくと、それだけだというので、七面倒くさくなつたぼくは、そうではない、麻暮氏の声の、おそろしいほどの威圧に負けたぼくは、【D】のありかをおしえた。

麻暮氏は、京都にいくつもりだったが、その必要はなくなったから【D】にいく、といった」

「善吉は【D】を裏切つたのか」

大海は詰問の調子ではなかつた。

「裏切るのは、これからや。

おやじに会つて、すべてをたしかめてからや」

「いまの自分には、その勇氣もない」

「それと、〈愛信会〉と【D】の関係をきくから、直接の関係はないとおもうと答えた。

麻暮氏は鼻で嗤うかんで、それなら〈愛信会〉の教祖日下典禪の息子がだれか、知っているかときくので、しらないと答えると、君の竹馬の友の松本大海だよという。

麻暮氏はぼくの戸惑いの声をききながら、電話をきつたんや」

「麻暮、正作、か」

大海は、もはやうなるしかないという声音で、つぶやいた。

「しつとるのか」

「もう十年くらい前だから、うろ覚えだが、父玄信の屋敷で見たことがある。

ごぞんじのとおり、父の前ではだれもが平身低頭だが、あれほど凶々しく猛々しい男を見たことがない。

父は圧倒されて顔色をなくしていた。

一見さえない小男だが、口ぶりからかんじたのは、やけに頭がきれ、カンが冴えるということ、動きぶりからかんじたのは、自分が武道の世界で目にしたことがないほどの、武道の達人だということ。

ステッキをついて山高帽をかぶっていたから、さながらチャップリンさ」

「そのチャップリンは、なにもしないで帰つたのかい」

「あれこれ捨てて台詞をはいていたな。

帰つたあと、父玄信は、麻暮正作の名前を、呪いをかけるみたいに、なんども

吐いていたから、おぼえている」

「ぼくは、場合によっては【死んだる団】を退団するよ」

「きっと、ただではすまないよ」

「どうせ、ただではすまない身やないか、なにもこわいものはない、大海のおやじも、ぼくのおやじも」

「父玄信は、かぎりなく優しい人間だ、父が貧しい人びとや恵まれない子どもたちのために、どれだけの施設を作ったか、しているよね。」

父が【D】の黒幕だなんて、眉唾もいいところだ。

しかも自分が、会ったこともない〈愛信会〉の教祖の息子だなんて、意味がわからない」

しきりにうなづいていた善吉が、踏ん切りをつけてたちあがった。

「いちど家にもどって、おやじのことでもかんがえながら、頭を冷やしてみる。

それで冷えたら、あとで岩風呂にはいりにくるよ。

どちらにせよ、身を浄めておいたほうがいいからね」

「自分も父親のことを、もうすこし真剣にかんがえたい。

もっと善吉と話をしたほうがよさそうだから、ころあいをみて岩風呂に行くよ」

四日、午前十時。

舟木英介は、朝山完吉のなきがらを前に、郵便配達バイクが到着するのを待っている。

舟木は、山内参三への報告書の覚書を手帳に記しながら、やはりまだ悪夢を見ている気分だった。

いっしょに嵯峨野までやってきていっしょに話をしていた朝山の、首と胴がはなれていることが信じられない。

『暗殺論』の思想家であり、日本哲学界の第一人者が、死んでしまったことが信じられない。

朝山完吉の死を、総理大臣の死よりも百倍も重くかんじる青年は、何万人もいるにちがいない。

天下の朝山が死んだというのに、このあかるくつよい陽射しはどういうことなのだろう。

はやくも山道の雪はとけはじめている。

それにしても、辻中亀夫はどこに消えたのだろう。

亀夫が朝山を殺したとは、単純にはかんがえられなくとも、いまは亀夫のほかにはかんがえられない。

ようやくバイクの音がきこえ、すかさず舟木は表にでた。

郵便配達バイクの後部座席に、トレンチコートとスーツといった姿の中年男がのっていた。

バイクからおりた男は、
「新宿署の刑事の山風です」

と洪い声で名のった。

舟木も名のり、山風を部屋のなかに促した。

朝山の死体を見ても、山風は驚かなかった。

「おそかったか」

とって、舌打ちをただけだった。

舟木は、昨晚から今朝にかけてのあらましを山風刑事に報告した。

舟木の話聞きながら、山風は朝山の死体をしらべていた。

「凄く斬りくちだ。

辻中亀夫という男は、よほど剣の達人だな」

舟木はなにも応えなかった。

亀夫が犯人だとまだ断定したくなかったし、亀夫が剣の達人ともおもわれなかった。

そのうちに山風刑事は、朝山のシャツのポケットから一枚の紙切れを発見した。

「なにか書いてあるけど、達筆で読めんな。

舟木さん、読めるかね」

舟木は受けとって、声にだして読んだ。

《散ればこそいとど桜はめでたけれ

うき世になにか久かるべき》

「百人一首か、なかなか風流な人だね」

山風の言葉を、舟木はうけて、

「これはたしか、『伊勢物語』にはいつている歌ですね。

朝山先生、いつ書いたんだろう、ここにくる前だとしたら、殺されることを予感していたのかもしれない」「ふむふむ、辻中亀夫としては、殺るべき相手が、むこうからやってきたというわけだから、飛んで火にいるなんとかで、天命すらかんじたろうな」

「山風刑事を前にいいにくいんですが、ぼくにはどうも納得がいかないんです。

つまり辻中亀夫のターゲットは本当に朝山完吉なのか、そしてこの殺人にどんな意味があるのか」

「探偵のカンかね。

おれにも刑事のカンがある」

山風は、藤上吾郎のいった『偉大なる殺人』というコトバにこだわっていた。

それは、とりもなおさず、偉大なる人物を殺す、ということではないのか。

山風が、[若者] プラス [偉大なる人物]、ということで、真っ先に連想するのは、朝山完吉だった。

「ともかくここで手をこまねいていても、ラチがあかない。

まずはここをでて、対応をかんがえないと」

山風の提案に、舟木も同調する。

「そうですね、ぼくにもやるべきことがあります」

山風は首をたてにふりながら、郵便配達と強引に交渉をした。

山風が運転席に腰かけ、うしろに舟木と郵便配達をのせて、三人乗りのスーパーカブは、けたたましい音をたてて発進した。